

著 君 園 薰 子 金

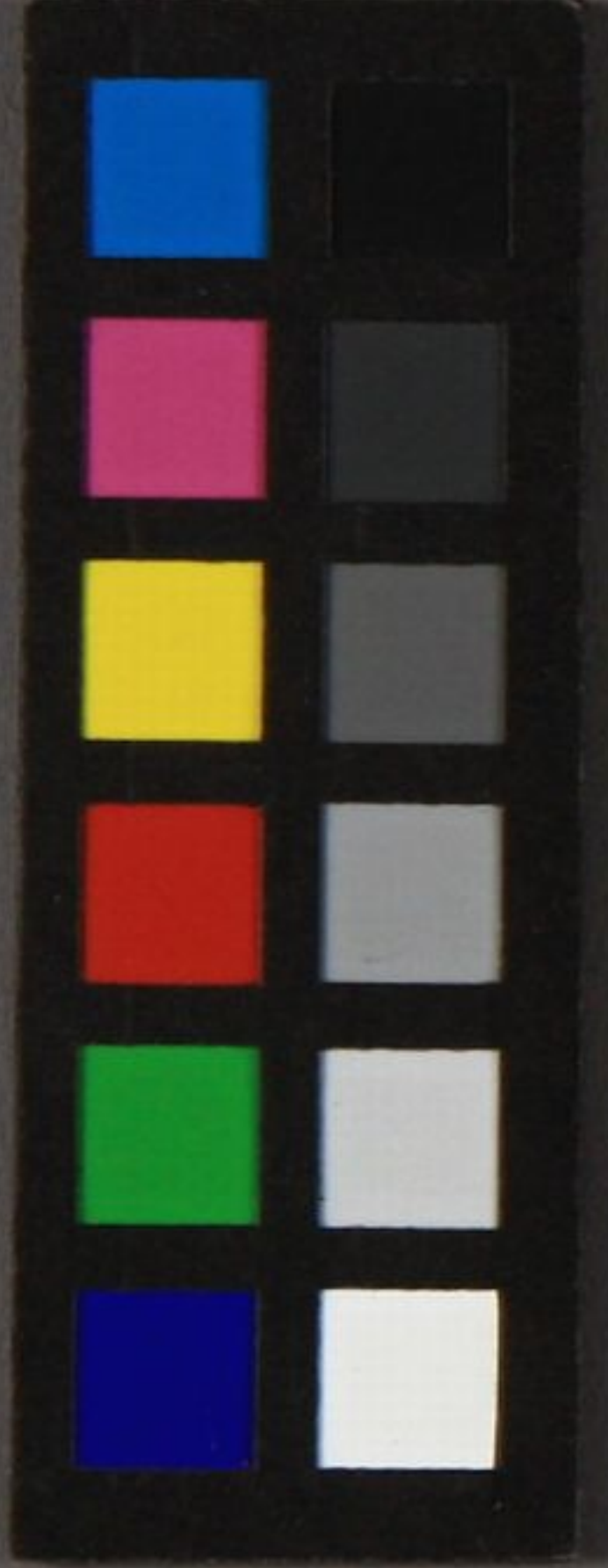
月 ね あ 片

落合直文君序 大町桂月君序
與謝野鐵幹君序

著者徒爾に歌はず、歌へは乃ち吟腔鳴り韵致
亮喟として盡くべからざらむとす、著者か名
江湖に騒喧せられて其歌一々定評あり、此に
懸疣の言を呈するに忍ひす、唯信す、満壑の
松影水に落ちて一禽雨を呼ぶの夕、燈を剔り
悟に凭りて靜かに其詩句を味へは、益する所
管に神靈を清うするに止まらざるべし、一卷
の『片われ月』所載和歌數百首あり、美文數
篇あり、情致穩約にして筆力遒勁、以て近時
詞壇の標囊とすべし

中村不折君畫 結城素明君畫
一條成美君畫 (寫眞銅版印刷)

版 藏 社 聲 新







著 君 園 薰 子 金

月 ね わ 片

落合直文君序
與謝野鐵幹君序

大町桂月君序

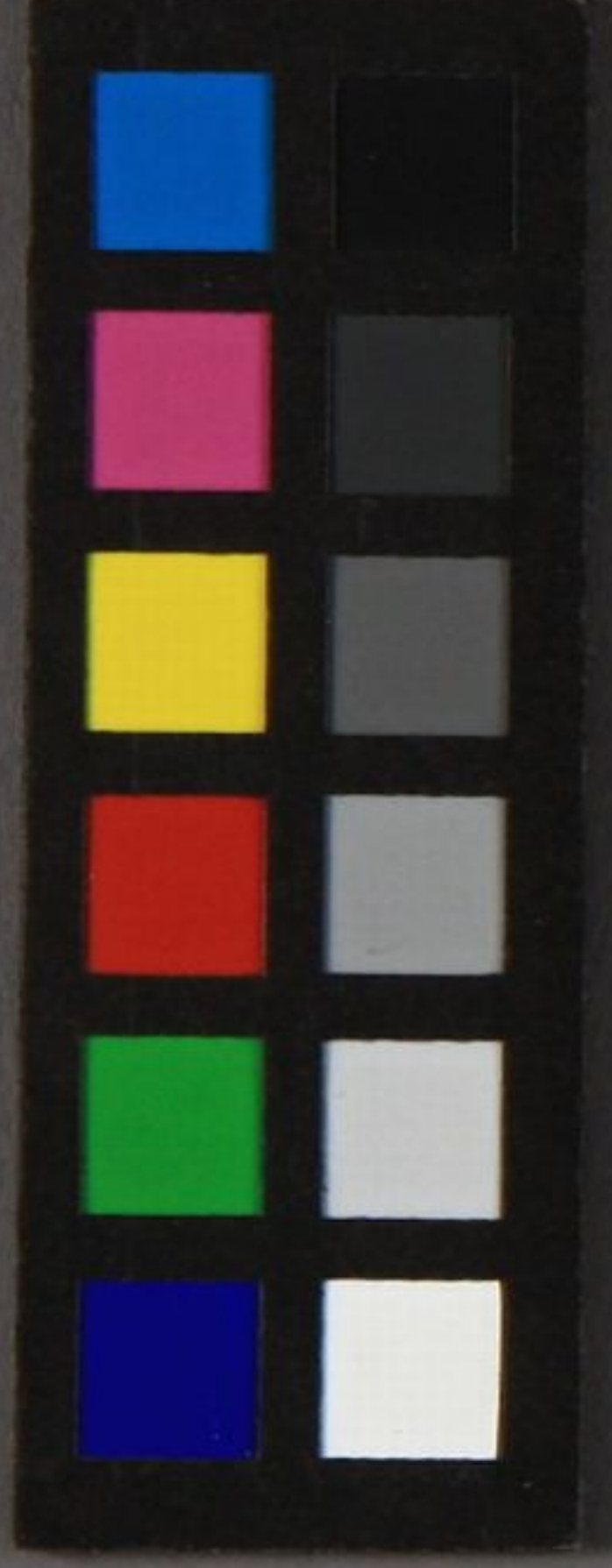
著者徒爾に歌はず、歌へは乃ち吟腔鳴り韵致
亮喟として盡くべからざらむとす、著者か名
江湖に騒喧せられて其歌一々定評あり、此に
懸疣の言を呈するに忍ひず、唯信す、満壺の
松影水に落ちて一禽雨を呼ぶの夕、燈を剔り
悟に凭りて靜かに其詩句を味へは、益する所
管に神靈を清うするに止まらざるべし、一卷
の『片われ月』所載和歌數百首あり、美文數
篇あり、情致穩約にして筆力遒勁、以て近時
詞壇の標囊とすべし

中村不折君畫
一條成美君畫

結城素明君畫

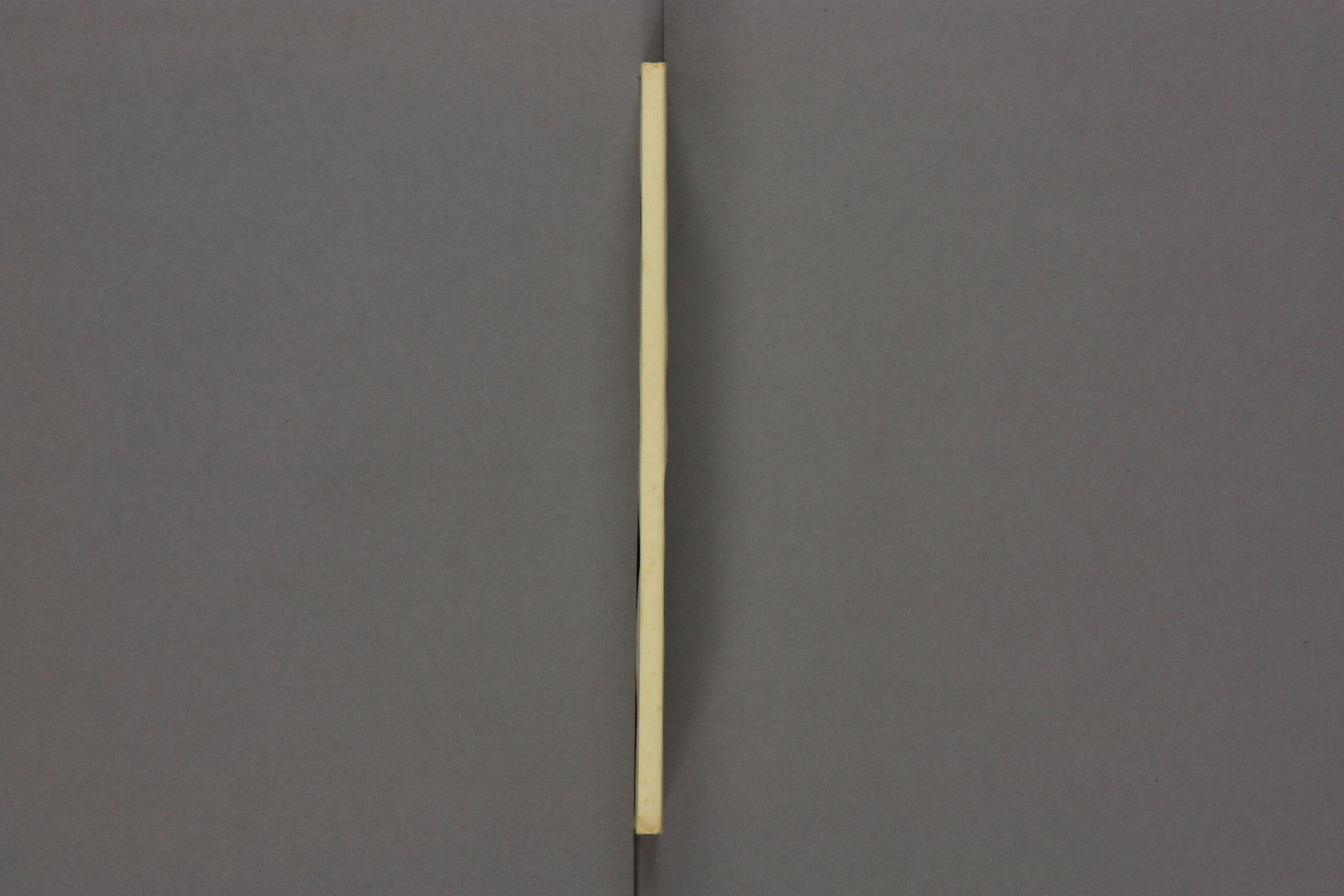
(寫眞銅版印刷)

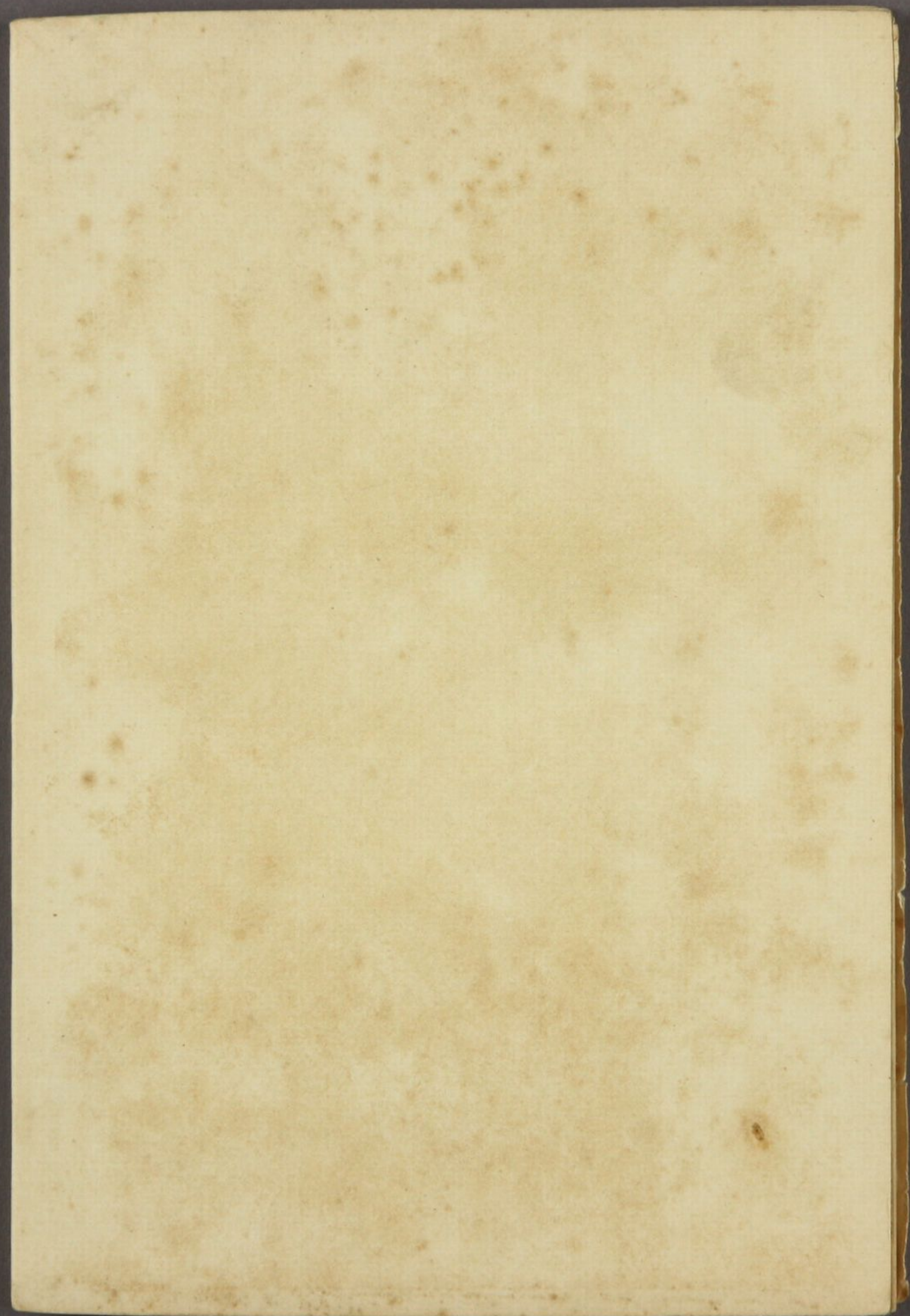
版 藏 社 聲 新

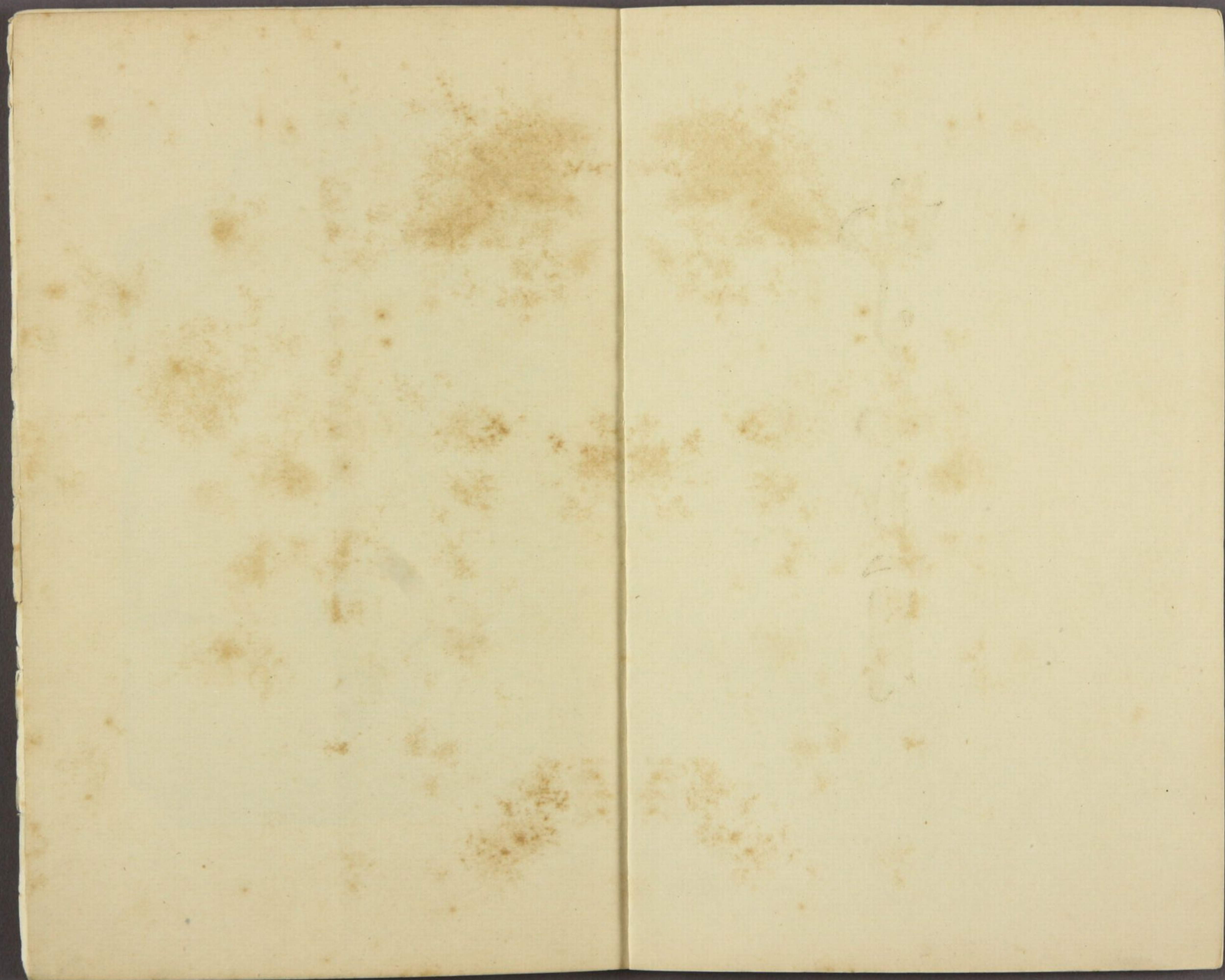


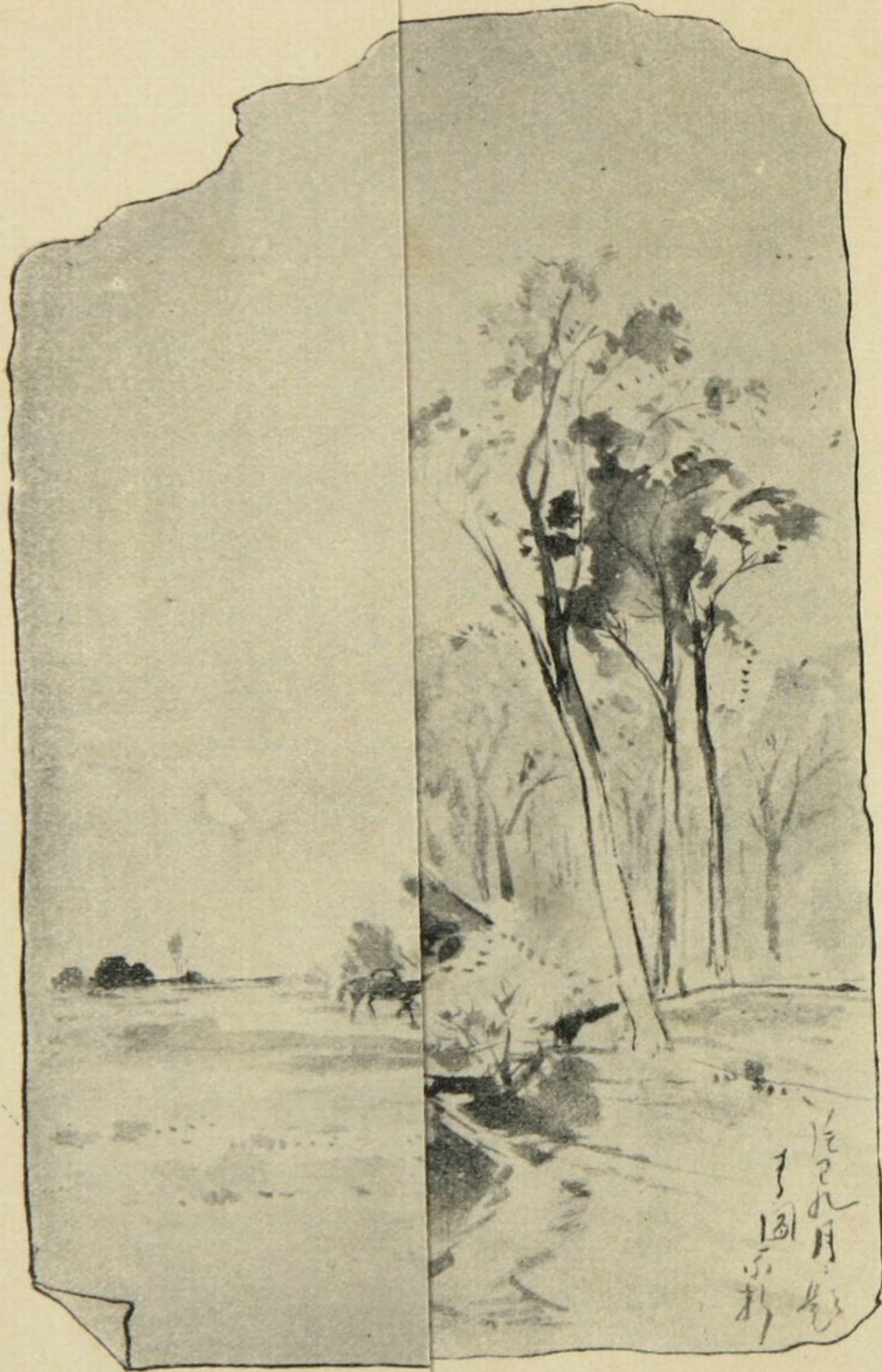
かきりし月













治元月
示村



壬午九月
于
不
朽

序

さ夜ふけて、門を叩くものあり。書齋を出づれば庭上の霜、雪の如く、築山の松に、片われ月、影さむく、かゝれり。飛石づたひ、柴折戸をひらき、門にゆきて、誰なるぞといひしに、薰園なりといふ。いかなる用のありて、かくおろくはといひつゝ、伴ひきて、内に入れぬ。薰園、人のすゝめにより、わが歌集を世に出ださむと思へり、先生の意は、いかにといふ。それよからむといひしに、

懐より、一卷をとりいだしたり。見れば、歌の數四百首
にあまれり。こはまた多きに過ぎずや、半にてもよか
らむといひしに、取捨してたべといふ。こゝに、燈火を
あかくして思ふまゝに、削りゆきしが、薰園は、始終、傍
にありて、をしげに見てあり。よみをへて後、薰園にむ
かひ、いにしへより、歌よみが、歌集を出だせば、それ
で、満足するゆゑか、その後の歌は、わろくのみなるが
如し。ぬしは、年まだわかし、これより、一志は、苦心した

まへといひしに、うけたまはりぬといふ。さて、題は、何
とかねほせしといへば、さきほど、御門にて、立ちなが
ら、月を見たりしが、今宵の月の、なにとなく、身に志み
ておぼえしかば、片われ月とやせましといふ。ろれよ、
片われ月に二あり、望の夜以前の月と、望の夜以後の
月となり。ぬしの歌は、いづれの片われ月なるかとい
ひしに、望の夜以後の月ならむには、ひと夜ひと夜に、
缺けゆくのみならむ問はせ給ふも、おろかなりやと

いひて立ちぬ。余は、門まで見おくりしが、かの月は、い
よく、さえにさえて、多望なる彼のうしろ影を照ら
せり。

明治三十三年冬のはじめつきた 落合直文

序

薫園、われと往來するあと五六年、われを目して兄と
呼ぶ。年齢に於て、學問の經歷に於て、われ、薫園に比し
て、一日の長なしとせず。われ、甘んじて、兄となりぬ。然
れども、われ、薫園に謂つて曰く、歌を作ることは、われ
卿に若かずと。薫園、わが時に作れる腰折を見て曰く、
兄の歌は、だめ也と。まことに、われ歌才なけれども、日
本の一詩形として、和歌を賞玩するを禁ずる能はず。

薫園の斯道に熱心なるを嘉す、其歌の流麗暢達、一種の趣あるを取る。以爲へらく、薫園、年なほ少壯、つとめて怠らずんば、大成する所あらむと。今や薫園、其歌集を梓に上すに際し、余の序を請ふ、これ、兄の役として辞するを得ざるもの乎。一言を題す。

明治三十三年十一月、小春日和の日か
げに背をさらしつゝ、

桂濱月下漁郎

六

七

薫園君の詩集をよみて

うれしさに

鐵 幹

星かげにすみれの露よ百合の香よわがあけ
ぼの道うつくしき

われそぞろましろき衣きぬの袖あはせ夕戸の梅
に君が詩誦する

詩集いよく御出版のよし、ちかづき
し春さ共にうれしく候。序などわれに
はむつかしく候。ただこれによりて教
うくる者、われのみには候はす。世にひ
びき渡らむみこゑ、なつかしくお羨ま
しく候。師走二十日、與謝野生。

例言

- 一、この書は、むれど、去年の秋よりふさしの秋にかけてよみし歌を、
順序もなしに、輯めたるものなり。
- 二、この書のために、懇切なる序文をもし給ひ、さては、くさくの
示教を賜ひたる落合直文先生、大町桂月兄の厚きみなさげは、今
更なられど、ふかく身にまみてなむ。又、常にわが歌に注意をくは
へ給へる與謝野鐵幹兄の、特に過分なる序をおくられたるも、か
たづけなきさふる。
- 三、この書は、友人佐藤橘香、高須梅溪、奥村梅阜三君の、れもごろなる
すいめのいなみがたくて、なほ早しき知りつゝ、をこがましくも、
世にいだしたるなり。思へば、三君の厚意は、うれしさいはむか、な
かく、にうらめしと言はむか。

四、この書の挿畫のひきつなる結城素明君の作は、君が志願兵にて、入營せむとするにあたり、なにくれさ、いそがはしかりしにかゝはらず、わがために、畫きおこせたるもの、君が友につくすまごゝるは、あらためて、言はざるべし。また、不折畫伯の、わきて意匠をあらされしものをよせて、さびしきわが歌の集に、句ひをそへられたる。一條成美君の、わけて、われに贈られし作を、たまく、まゝに載するまさをえたるなど、いづれも、よろあばし。

五、この書の末なる美文は、みな三四年前の舊作にて、つたなき、見るにたへれど、歌のみにては、やゝもの足られば、くはへたるなり。

明治三十三年十二月二十日

金子 薰 園

片 わ れ 月

金子 薰 園 著

あけがたのそらありきにうぐひすのはの音き入たり
藪かげの道

桃のはな君に似るとはいひかねてたうつくしと愛で
しやみしか

おぼろ夜をなにとはなしにかを枝をりてもたせてやが
ぬ白桃の花

またしてもうづだかくなりし歌反古を焚かむとすれば
小雨ふりさぬ

駒ながらうたを手むけて過ぎにけり關帝廟のあけがた
の月

鳳仙花照らすゆふ日におのづからその實のわれて秋く
れむとす

亡き母の戀しくなりて日もすがら山のおくつきめぐり
見しかな

二

まをすあときをしをふればねくつきの百日紅に夕日か
たぶく(母君の墓前にて)

三

わかれいふ友をば門かどに待たせねきて月のあかりにかき
し歌かな

雪ふかきあら山中のひとつ家を饑うゑしまがみのめぐり
ては吼ゆ

秋雨のろぼふるゆふべひそやかにいたちひきゆくわが
歌ひと巻

花ぐもりまばしははれてのどやかに日影さすなり嵯峨
の山里

ゆふづく日かすかにのこる山もとの菜の花ばたけ妹が
家見ゆ

東宮の御慶事を祝ひまつりて
貧しくてさゝげむものもなき身にはそれよ真心こめし
わが歌

梅の歌の中に

四

鶴にのりて菩薩ひとたびくだりませあけがたきよき白
梅の花

五

ゆふ月に遠山ばたけほの見えて梅さくあたりふえの音
ぞする

耳もとに女神めづさやくこゝちしてひと夜あかしぬ梅の
花ぞの

亡き母のおくつきどころとめくれれば梅さきそめて日は
斜なり

わが世をばおもひわづらふ柴の戸に梅が香さむき片われの月

まる窓に老木の梅のかげ瘦せてすみ繪のまゝのうす月夜かな

梅かをる野中の水のきよきかな石ところ／＼苔ところどころ

ひともとの紅梅かをる脊戸垣に朝日にほひてにはとりのなく

六

わが歌を女神めがみのゑみてうけませる夢のなごりか梅が香ぞする

七

あかつきのかねもかをりて山寺の梅さくあたり月かたぶきぬ

吾妹子と後たごれさきだち梅かをる野をさまよひぬおぼる夜の月

○

松かさのこぼれてさむき山かげにくち笛ふくや頬ほの瘦せし人

山寺にひと夜やどりて何となく達磨の像のまたはしく
なりぬ

なにものか胸に入りけむ年ごろの懊惱なやみわするゝふゆの
夜の月

ひとすぢの本郷ほんごうどほり夜はふけて年くれがたの雪まづ
かなり

王子ちうじへとかへらむ友を見おくりてたばたの里に鴈をき
くかな

日あたりの菊のはたけに二つ三つ名もまらぬ鳥のさて
遊あそぶ哉

色つきしオレンヂの上に霜見えてあさとで寒しには鳥
のこゑ

ゆふぎりに舟はかくれて笛ばかりすみわたりゆく波の
上かな

やれむしろかづく乞見かたみもふる雪を寒しとのみは思はざ
るらむ

さしいづるわが日の本のひかりにぞ雪とけぬらむあだ
し國原

のどかなりさくらのもみぢちる背戸に落穂をひろふ鶏
のゑ

水ぐるま間どほになりしさと川のふけゆく月に水鶏な
くなり

とぶ鴈のゆくへ眺めてやなぎ蔭たゝずみをれば一葉ち
りきぬ

税所敦子刀自を悼む

米の世にまた出でまさむ君ならじくやしきかもよまき
鳥の道

夢に得たる三首

みほとけの清きみこゑをきゝしかな高野の山のありあ
けの月

御戸帳みとちやうのほとけにはかに輝きていひしらぬ香のわれを
うつかな

おもひねぬ人の子あはれわが鞭に死ねよとのらす御佛
のまゑ

萩の家先生の安房におは

するを志のびて

安房といへばわが祖父の國その國にわがなつかしき師
の君います

同じ世に生れあひたる嬉しさは我も御弟子みでしのつらに入
りぬる

花のごとき歌秘めませる御袖よりはじめて春の風はふ

くらむ(春の初めなりければ)

師といはゞたゞ大かたに人や見む親のなさけもかねま
せるかな

鶯をわが庭に葬りて

ふた坪に足らざる庭も折ふしに手むけむほどの花はさ
くべし

よる／＼はちひさき神のくだりきて呷くこゑすうぐひ
すの塚に

春のころ梅溪君のふるさとに
かへらむとて出でたゝれたる

を憶ふ

花のころを病のまどにたれおめて旅なる友のふみをま
つかな

春風に菅の小笠をかたぶけていまか見らむ嵯峨やま
ざくら

ふるさとの野べの董よ一つくほゝゑみそめて君を待
つらむ

○
あのゆふべ家なる人も夢や見むふゝきになりぬ志べり
やが原

ちざりてし人待ちをれば椎がもと椎の實落ちて夜はふ
けにけり

山に入らば心あさしと笑はれむとにもかくにも苦しか
りけり

山にしては慰むべくもあらざりき塵にまじりて歌はふ
もはむ

戀人におもて見らるゝこゝちしてあやしわが口おもく
なりぬる

花どきを何にこもるときくな君なか／＼胸はくるしき
ものを

めづらしと聲かけし人かけられし人名を忘れしがおも
しろきかな

若草のはてなき野べを驢馬の背に何とはまらず三たび
めぐりぬ

十六

れどろきて鶯たちぬあけがたの若葉のあらし身にやま
みけむ

山ふかき谷の清水にちりたちて水を葉がうへのひるの
月見る

あかつきのきよき氣吸ふと窓あけてながむる庭に白菊
のはな

水を見て君をおもひ雲を見てわれ歌おもひ秋の川わ
たる(素明君と共に舟を泛べて)

十七

夕やけの中にたちたる柿の木
の柿のひとつに目白つど
ひよる

いづこにか君待たすらむるの
ゆふべまるしの松は霧の
中なり

野分してもずの宿こそあれに
けれ夕日さびしき門のを
やなぎ

柴おひてくだらむとする山が
つの小笠ふきまく雪おろ
しの風

十八

十九

桂月兄の書に泣きて

かくまでに我身の上をおぼす
とは思はざりけり君がみ
なさけ

來ん年の夏はかならず京に入
らむさきくあれよと君の
玉づさ

とめかね泣きてわかれしその
春はまためぐりさぬ君
はかへらず

世にあるもかひなき身とは知
りながら君がなさけよ戀

しかりけり

兄のごと志たひなつけば弟にもまさりしなさけ君かけ
たまふ

原町はらまちの月の夜ごろをうた問ふといくたび君がかどたゝ
きけむ

病床にてよめる歌ども

の中に

臥しながらきくはかしこしいもうとの香くゆらして心
經をよむ

わが咳せきのこゑのみさえて日あたりの窓志づかなる山茶
くわの花

かたことの弟のはなし興に入りて夢にも見しか鬼が志
まの山

汗にぬれて夢はさめけりさ夜中のこのわびしさを誰に
かたらむ

志のびかね病みて日をふるくるしさに枕を蹴たる夜半
もありけり

ふししながら桐の葉にききし雨やみてねむりをさそふこ
ほろぎのあゑ

枕べにちりし小瓶こびんの花つばきねながら見つゝものをあ
そおもへ

かすかにも虫の音きあゆ軒端なる芭蕉の風のたえまた
えまに

杖によりてうしろのそのにいでゝ見む牡丹さけりと妹
のさ

亡き母のみもとにかよふ夢のまは病のうさもわすれは
てつゝ

錦きてかへるか人のうらやまし親を泣かせてわれは病
みたる

ねがひをばはたすその日やいつならむ親は老いてあり
我は病みてあり

誰によりて病のうさを忘れむと君も病みつゝわれをお
もはむ

手紙

谷中なる草庵に病を養ひて

朝鮮なる鮎貝槐園兄を懐ふ

五年のむかしに似たるこのゆふべ芭蕉の雨をわれひとりきく

病中、菽の家先生を訪ひて

道のため身をいたはれのみまとはは身に志むばかりかしこかりけり

御庭を眺めて

明日まらぬ命とおもへば何となくながめられけり菽の

下つゆ

親しき友なる石渡信太郎君

に訪はれて

下りゆく世をのしらむ意氣もあらず病めるわが身の相見ては泣く

同君と共に寫したる小照の

裏に

二人たましく生れあひたる塵の世よかなしくもありたのしくもあり

母の御墓に詣て、

松風よいたくな吹きろなき母のもののためはばきこえ
ざらまし

母のためうゑし小萩もをれふして御墓のまがき秋くれ
むとす(野分のあしたに)

○

うぐひすのだみたるこゑも春めきて山のかすみ朝日
さすなり

としぐゝに花まれになりてあはの春はたゞ二つ咲きぬ小

二十六

町といふ椿

亡き母にあまりよく似しうしろ影かげ見ゆるまで見お
くりにけり

母よとてあとねひしきて一あゑをかけまくほしく似た
る人かな

廣庭に牡丹の見ぬさびしさよはる日うらく蝶のさ
て舞ふ

管笠に花の雪のせて雨にぬれて歌ぶくろさげてかどた

二十七

いく人

夜のまよりいでしゆく君小金井のあしたの花は君ひとり見む

祖母君のみともにたちて花を見る今日のひと日は雨ふらであれ

せはしといふ二人をまひて三人して昔笠すがた春の旅せむ(橘香梅溪二君に寄す)

花ぐもり又花ぐもり花ぐもりと花どきの日記につねに似

二十八

とかな

かささして搦きし繪の筆一あゑにまたとらせけり山ほととぎす

螢飛ぶわか葉の小道とめゆきて知らで過ぎたりいもが家の門かま

外山博士を悼む

坑あなにすべきえせ人あまたながらへてくちをし君は苔の下なり

二十九

梅溪君を迎ふ

旅にいでゝなぐさむすべもなかりしか君が頼たのいたくやつれたりけり

鐵幹兄に寄す

京に入りてまた雄たけびの歌ありやあゝ羨うらやへぬ君がうしろ影

世のちりに汚れやせむと雲の中に秘めけむ君がうたをきかばや

ある時また

三十

三十一

詩の筆を焚かで今なほ手にもてり君がなさけにたゆたはれつゝ

をさなしとかつひひすてゝ我歌をとらぬも友のなさけなりけり

暮笛集を讀みて薄田泣菫君

を憶ふ

ゆふ風のあしの葉わたる河にして笛ふく君のおもかけに見ゆ

妹と共に一夜を徳富蘆花君

の小説「不如歸」に泣きあかし

けるをり

泣くな君われまた泣かじとはいへどいたましきかな人の世のこと

卷中なる浪子を

うるはしき女神の御手にいだかれてなほわが郎きみやわすれかぬらむ

おなじく武男を

かへりきて男泣きにや泣きにけむいとしわざもは苔の下なり

妹と堀切にあやめ見にもものし

あやめ見に兄は供ともして母君に汝なれのおはれしむかしをぞおもふ

ろのかへるさ雨にあひて

いもうとは車にのせてかへしけり墨田づつみの雨のゆふぐれ

葉ざくらの露にろぼちてたどりゆく長き堤のおもしろきかな

結城素明君を訪ふ

ほとゝぎす一こゑなきてゆくあとに君が門たしくわけ
がたの空

○

菜の花のさきつゞきたる山ばたのかぎり見にけり茅ふ
ける家

藪かげによるぼふ鳥居半見にてあかきのぼりに椿ちり
かゝる

三十四

三十五

人ちがひならばゆるせと聲かけて呼ぶ名は花子おぼろ
夜の月

おうといひてあるじは出でず柴の戸にわれたちをれば
木瓜の花ちる

君にあひて今宵の酒のうまさかなあゝの酔ひごとち十と
せぶりなり(石渡君と語りて)

唾かけて棄てらるゝとも君が手にふれつと思へば嬉し
かりけり

うつくしとめでゝかひたる桃の實をむきながら見る軒
のゆふ月

白薔薇のかきねまらめるわけがたに語らひゆくは夜べ
の名残か

たちよりにて蟬のなきがらふみしかなひと葉ちりたる桐
の下かけ

花おちて豆ばかりなる柿の實のあからむあろの霜をよ
ろおもへ(あまりのあつさに)

子規先生を訪ひけるをりくに

もゝとせの後にあらずば詩の神は君を雲井にまねかざ
らなむ

何となく襟たゝされぬ上ねぞし君が御門みかどのちかしとお
もへば

厄月きづきの五月さくわつもなかばすぎむとすまささくいませまさを
かの君

ふた鉢の大輪の牡丹まくらべに君がやまひをまもりが
ほなり



あやしみて見まさむ君をはばかりてひろかに拭ふわが
涙かな

不折畫伯の贈られたる畫に

淺草のみてらのいらかほの見にて夕日うするゝ志らは
すの花

鳴雪翁を訪ふ

芭蕉蕪村俳句はなしの中にまたをりゝまじる源氏物
がたり

素明君と共に堀切にものして
花あやめみな君が手の書に入りてわが歌ぶくろ歌な
かりけり

それより吉野園にゆく道にて
麥畑にあやめ四五本まじりけりさながら君の書を見
るがごと

ふるやしろ青葉がくれにほの見はて森のひがしを水流
れゆく

吉野園にて

花あやめ一つく／＼に名はあれど君が名に似し名はなかりけり

服部躬治君と話す

君がうた君がこゝろのまゝにして世におもねらず世にへつらははず

○

ほゝゑみて手まねく方に人ひとり載せてきにけり竹屋のわたし

君なくばかばかり胸はさわがじな國く手てしづかに匙さしを投

四十

げしとき

はかなきを夢ぞといへどおんこゑの耳にのこるも母のなさけか(夢亡母)

誓ひてし十とせはあだに過ぎゆきて母のおくつき苦むしにけり

蝶ひらく／＼ゆくへのどけきながめかな菜の花一里春の風ふく

旅のうた焚かむとすれば松の火にみぞれふるなり山か

四十一

げにして

おもひえぬわが身かなしや年ごろを碧巖一部ふとあろ
にして

あたらしき歌の眞たまを袖にして君はゆきけむ天ぐも
の上に(友の計をきいて)

風をりく／＼看^{かん}經^{きん}のこゑをおくりきて星飛ぶ夜半の寒く
もあるかな

詩書幾巻とりちらしたる枕邊にあさ日さし入りて水仙

かをる

まぐれふる夕ぐれさむみ袖をおほふをさな子あはれ世
の石ぶみ

てる月にひれふる魚のかけ見わたるゆく舟かろし江戸川
のみづ

橘香君に訪はれて

木の間よりもれくる月の影を見て歌かきをれば君の來
ませる

梅溪君の郷に歸れるを懷ふ
蚊やり火をくゆらしながら祖母君をいたはりまさむ東
團扇あふぎに

仙台にものせし橘香君より
一書をえて

ほどゝぎす今きゝたりとあるされぬ青葉城下のたろが
れの月

素明君のあやめの書を床間
にかけゝるある

あめくくと雨のねときく夜半もあり君がゑがきしあや

四十四

めの花に

四十五

向島なる同君より招かれて
さきろめし秋草の花見に來よとかけるあのみ涼しか
りけり

同君と共に百花園にものして
八千ぐさの花のまら露ちる見にてあしたすゝしき秋の
はつ風

猫の歌の中に

軒のもとに遊ぶ小猫をこゝろなくおどろかしけり蟬の

一さゝ

聲ひくゝうたふわが歌夜な〜に汝のみきくかわが膝
の上に

尋ねるし手飼の猫のゆくりなくわれ見てなくよ人の門
の上に

橘香君のまな子のうせぬと

きゝて

人の世にまばしとてあそ生れけめ雲井のよその神のみ
どり子

四十六

わが幼き妹もあなじ病にて

はかなくなりければ

いもうとのいまはのさまもまのばれて悲しき夜半を秋
の雨ふる

かなし子を柩に入れてなごりぞどながめし時の君をこ
ろおもへ

山地將軍を悼む

西比利亞の荒わしがりをよろにして君はいづこを天が
けるらむ

四十七

亡き母のうつしゑのやうく

きねゆくを見て

年ごとにまさるなげきの霧のうちに君が形見もきねむ
とすらむ

一葉女史の身まかられたるあろ

雲井より笙のおとすなり君はいま月のみふねに棹やさ
すらむ

富木松濤君の三年の忌に

君をいたみなくく、かきし水莖のあともかわかて三と

四十八

せへにけり

四十九

同君の七年の忌に

七とせのむかしの誓あだになりぬ君世にまさず我わざ
成らざ

うせし一葉女史を志のびて

秋くればまづ君をあそ志のばるれ桐もひと葉ののきの
ゆふ風

○

かたゐらの夢さむからしやれどもにねく霜見わた月ぞ

さねたる

ありわけの月かげあはき圓窓にきりの葉さろふ風を見
るかな

夏ながらまぐれの雨のこちして鶯の花ちる木がくれ
のやど

鐘の音にもみぢこぼるゝ山寺の折戸さびしくゆふ日さ
すなり

雲井より雪にたぐひてくだりけむくすしき鳥のこゑの

五十

きまゆる

待つ人は思ひたねにし柴の戸にさはるは夜半のみゆき
なりけり

たきものゝ煙ぞもるゝ母のためにとりのをとめ經や
よむらし

梨の花かすみねむるおぼろ夜に夢よりあはき月を見
るかな

よひの雨のなごりの露のまら玉を硯にゆるせまどのわ

五十一

かたけ

芭蕉葉にかきながしたる水莖のきぬしゆくへは雨や志
るらむ

年はまたあらたまりけりほき言をきこゆむとする親も
あらなくに(人に代りて)

亡き姉のむかし覺はてこひしきはピアノさあゆるゆふ
べなりけり

葉鶏頭一もとたてるわが庭のかさねさびしきゆふづく

五十二

日かな

はつ時雨よきてもふれや朝顔のちひさく咲きて秋くれ
むとす

秋寒あきさむの書院寂としてふるびたるだるまの繪像どもほし
げなり

いさましきうり聲いつかさびれたり年の夜市は更けに
けらしな

おのづから君が八千代の祝ひには園生にあまるまつ風

五十三

のまゑ(金井翁の賀に)

世にあらば紙鳶あげぬべき年なるを物おもはする春の
はつ風(亡弟平一を懐ふ)

世にまさばまはらぬ舌に愛らしく父よ母よとよぶらむ
ものを(一柳君のまな子の一周忌に)

心して身をばいたはれ汝をねきてはらからどてはなき
身なりけり(妹の病みけるをり)

冷ははてし澁茶すゝりて世がたりに今夜も更けぬ松風

五十四

のまゑ(石渡君と語りて)

ちりの世にそゝぐは惜しき涙かなまなみ拭へよものお
もふ君(人のもとに)

あたゝかき南の椽にかたりあひて二人いつしか眠りけ
るかな(友の家にて)

いつの頃なりけむ萩の家

先生のもとに

おきろはるめぐみの露にうるほひて名なし草さへねひ
いでにけり

五十五

紅葉先生を訪ふ
年ごろのねがひたらひて君を見るよき日と志るす我家
の日記

佐々木弘綱翁の十年祭に

わがどちのこのごろの歌を雲の上にうしとおぼすか嬉
しとおぼすか

祖父君と呼ばせまつらぬうらみかなうまごの君のらう
たげにして

はちす見に不忍池にもの

して

うすもやにつつまれはてし池の面のいづあなるらむ蓮はす
ひらくおと

白蓮のひらくをききてさまよへるあのかかつきのすが
くしさを

亡き母のいます御國のすしさをうつつにむすぶはち
す葉の露

あら蓮のかげにねむれる一むれの鴨ぞよりくるわが足

もどに

人ならば歌をたまへといひてまし君がながむる志らは
すの花

夕すゝみに不忍池をめぐりて

あす咲かむつぼみも見ゆるはちす葉の露にすゝしくや
どる月かな

鐵幹兄の渡清すとききて

氣はあがり心をどりてあの夜ころねられざるらむます
らをの友

五十八

五十九

かかるをりただよのつねの風流男かみと志きばしは君をなす
よしもがな

同兄の病にふしける時

君によりて我道なほも光ありミューズミューズの神よまもらせ
たまへ

石渡君に寄す

こゝろ知る君もある世になにしとか世をも人をもわれ
うらみけむ

知る人もなくて朽つるが多き世に我は死にてもをし
か
らぬ身ぞ

世の人のあゝろいよく冷にゆきていよく君の志た
はしきかな

おのづからこぼるゝ涙きみならでくみしる人はあらじ
とぞおもふ

小埜君の大學の業を卒へて歸

郷するを送る

錦きてかへるわが子を門に倚りて待ちわびまさむ父君

六十

六十一

母ぎみ

幅井江亭君の書に題す

時へとて鷄のひとむれいろぐ見ゆ秋かせさむきゆふぐ
れの庭

下村觀山君のゑがきし長安

一片月に

ころもうつあゑもきあゆるちちしてまづかに澄めり
長安の月

おとづれ絶えし友より新年

の賀状をえて

わが名をばなほ忘れずや水莖のあとなつかしき友のほ
きごと

鐵幹兄の朝鮮に在りしころ

から山に今年もさける梅のはな問ひても見よや國のゆ
くすゑ

病中、大宮の觀櫻會に招かれて

花どきを大宮のまとる來よといふよさのゝ君の文はと
どきぬ

行きもせば病れもらむとどまれといさむる親をいかに
かもせむ

歌の上に思ふこと多きまのごろをただにやまむはくる
しかりけり

病やゝ癒にける日、鐵幹兄を訪ひ

てあはず歸りて同兄に寄す

ガラス窓ごもにのみ見し花をあけはなしても見つる
今日かな

ふら／＼と家をいづれば春風に尾をふりながら犬のよ

りくる

君がかどたしきうるまで我病かろくなれるをよろこび
てたべ

君ささでほいやなからむふとあろの我歌よとすしり
泣きする

わが胸のまよひの雲をいかにせむいなれざりけり君が
家の門

阪井久良岐君を訪ひて

六十四

君が飼ふ軒の家はとよく馴れてきみがるまなる額にと
まるよ

六十五

同君の次女を悼みて
看護婦に抱かれながらわが方を見たるまなざし忘れ
ぬかな

○
ほろりゆく火かげながめて長き夜を思ひておほき梧の
葉の雨

蟬のこゑとほくきあはてありあけの月なほ残る空のあ

なたに

白雲のたなびく方にこゑありて我名をよべどゆかれざりけり

まのごろの二人のうたを思ふまゝに罵りあひてはては笑ひぬ

亡き母のあけよとのらすまゝちしていく夜立ちけむ柴の折戸に

君が名のきみにふさはぬうらみかな清きはいつれ白百

六十六

合の花

六十七

桐の葉のひとつおぼれしかたはらに咲くよ小さきおしろいの花

わが友のうせしあらせの文よみてゆふべの雲を眺めやるかな

大風に吹きをられたる無花果のをれめに生ひぬ名もなき小草

新しき書をかけわたしあたらしき歌よみ君は君が居間

を出てず

かの寺のかの澁柿のあぢを志のび山に入るべく秋ふけ
にけり

魘なやはれてかすかにうめく病み人をよびさます夜のふけ
にけるかな

師の君の志ばしおはせし宿の前すぎがてにしてつひに
宿りぬ(品川なる某旅館にて)

さりともと思ひつゝなほ御寐息みねいにいくたび胸をさわが

六十八

せにけむ(祖父君の枕邊にて)

六十九

朝霧のうするしまゝに梅もどきさやかになりて日は出
でにけり

鶏きのなく野ずゑの岡のひとつ家やに山茶花さけり日は午
にして

年ごろを山にあもりてねもひにぬわれあはれめと友の
なげける

日もすがらもみぢの下にかたらひてやがて別れぬ山寺

のゆふべ

椽がはのはしらに寄りてさきろめし菊のはな見る小春
日和に

うせたりしちさき妹のこゑすなり菊をいけたる花瓶はなびらの
中にある夜半の寐覺に

小ちさき旗ちさき柩のうしろより志たがひ行くようなる
子のむれ

すゞしさのゆくへも見えて墨田川みなかみとほく飛ぶ

七十一

ほたるかな

夜もすがら魔とたゝかひてあけがたの寢覺さわがし木
がらしの風

小按摩に道をとはれてゐなたへとおくりやる夜の風寒
くして

服部君の歌をよみて

あゝろにもあらぬいつはりいふ人に戒めやらむ君がう
た誦して

素明君の入營するを送る
なづさひし畫筆やいかに君が手に銃^{てつ}とらす世のいきど
ほろしき

その後、同君に

あかつきの喇叭のおとにやぶられし夢のゆくへをまひ
しと思はむ

同君の贈られたる畫に題す

牛かひの牛ひきてわたる川ちかく月見草さけり秩父^{ちちぶ}の
ゆふべ

七十二

小林君の岡山の高等學校に

行くをおくる

みやこいでうた人蘭溪今ゆくとはるかに告げむ吉備
の中山

七十三

烏水君に訪はれて

畫^えにせむか歌にせむかとおろみに筆とりをれば君の
さませる

橘香君に贈る

八千草の花さき匂ふあけがたにうぶをあけし君がい
とし子

妹のかきし書に
ねもとらに日傘さゝせて姫君のすみれの花野たどりま
す見ゆ

さる人へ

末の世にままとの男きみのみと思ひしものをわれあや
まてり

いつはりの涙と知らて君が身にもらひ泣きせし夜半も
ありしを

清國よりかへりし人の某國の

暴状を語るをきいて

誰かいふ神もねはせぬ世なりとは見よやみそらに天つ
日の影

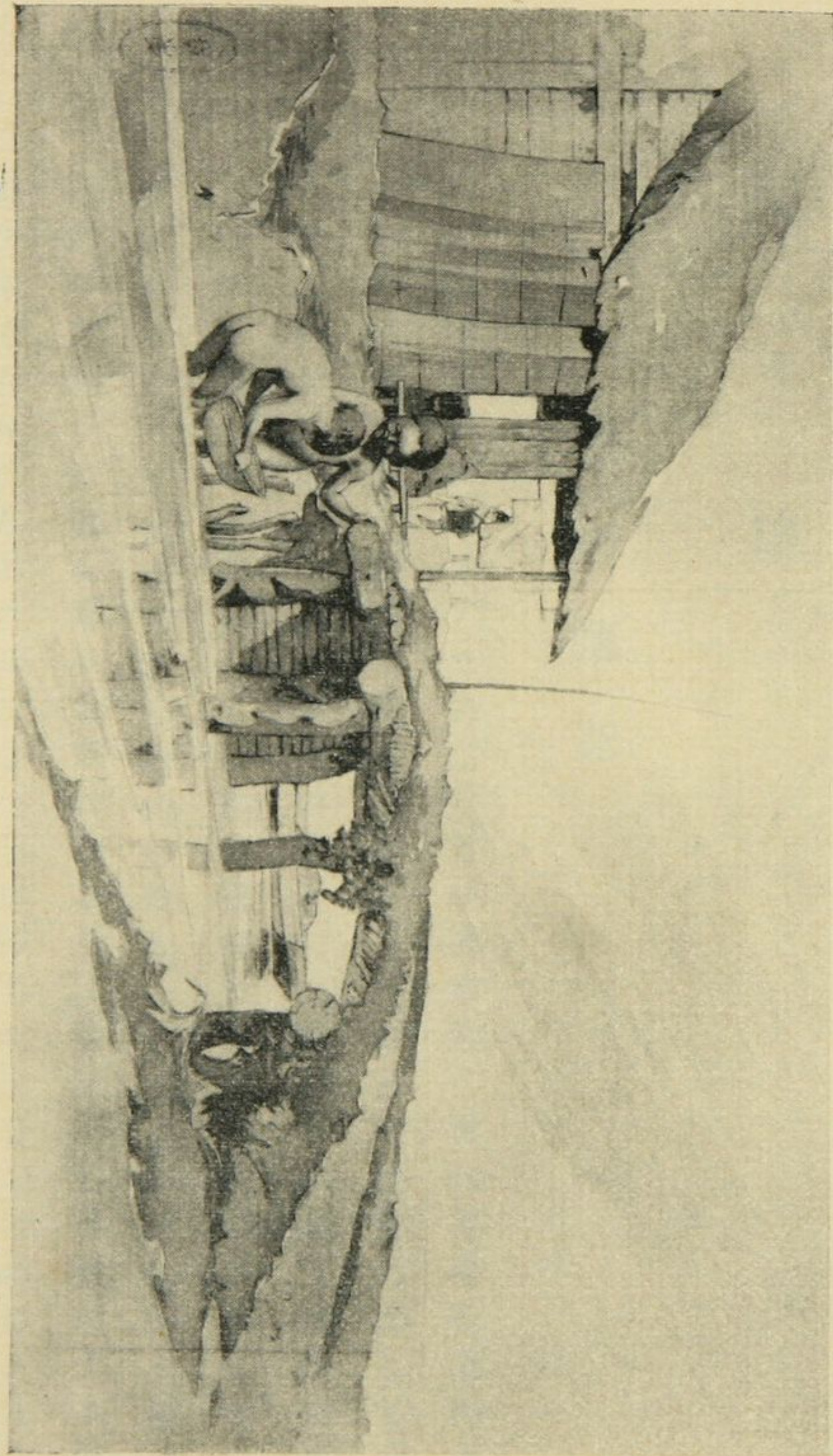
しみしらの血に汚さむはくちをしと思へど許せあの一
ふりよ

征清の役に戦死せし人このた

めに記念碑をたてたる某氏に

寄すとして

みいくさのまたびの功績いさをきくごとにゆるぎやすらむ君



のたてし石

松宮太郎君の追悼會にものし

にざりければ

みまつりのまとるにもれてつくぐとひとりものねも
ふこの夕かな

姉君の墓前にて

おとうとよよくとへりとものたまはず御墓の松にたれ
秋の風

片
われ
月終

蕭々集

窓の落花

わが富本重任君、今やすでに亡し。君が墓木、漸く拱して、青苔、墓門を鎖すも、われは、竟に君を忘るゝこと能はず。あはれ、君の訃音に接して、魂もきゆるばかりに、悲しみしは、昨日の如きこゝちするに、歲月流れて水の如く、はや三歳の春秋をすごして、君が三周忌の祭を營むの日も、まさに近きにあらむとす。まかも、君が音容は、髣髴として、わが目にあり。君が生前の當時を忍べば、胸も塞がりて、おつる涙は、滂沱として、轉禁ずる能はず。思ひめぐらせば、君のうせたまひし年、即ち、明治廿七年のことなりき。東

風馳蕩として、花紅に、柳緑なるのころ、千葉の第一高等學校醫學部に學びし君は、學期試験を終へて、直に上京しまづ、わが居を訪はれぬ。久々にて、君に遇ひしとて、なつかしさに堪へず、一小宴を張り、互に臂を把りて、快談し、獻酬數刻に及びけるが、君の面、やう／＼、微紅を潮し來り、慨然として、盃をわれに屬して、いへるやう、君と交り、ろめてより、いまだ數歳をも經ざれど、互に意氣投合して、交情、骨肉も啗ならず。年齢よりいへば、君は、われより五歳弟なれど、われは、君を兄の如く敬慕して、常に何事もうちあけて語りあへるとなるが、來ん三十年は、われの高等學校の醫學部を終ふるの時にして、君はや、大學に入り給ふの時ならむ。われは、かの校を卒業せば、二三年、伯林の大學に遊びて、斯道の蕙輿をさぐらむとす。かくて、わが歸朝の日は、君すでに、大學の門を出でて、名聲、やうやう、藉甚たらむとするの時ならむ。而して、君は、文學を以て、われは、醫學を以て、相

提携して、世にたゞむには、いかばかりか、嬉しからむ。ろの折、今日の如く、一堂に會し、酒くみかはして、談笑せば、いかに樂しきことならむ。勉めざるべからず、勉めざるべからずと語り終りて、快笑一番、わがかへし、大盃を、一口に飲みほして、餘瀝をも殘さざるさま、世にもいさましく覺えて、ろの風采、今なほ目にあり、その壯語、今なほ耳に残りて、忘るゝこと能はず。あはれ、前途にかゝる大抱負を有し、勉めざるべからず、勉めざるべからずと連呼せし君が、數月をも經ざるに、ろの年の夏、忽ち永眠せられむとは、思ひがけきや。九泉漠として、幽明處を異にし、英魂、一たび去りて、また還らず。當時の君が心事、思ひやるだに、涙なり。人生のはかなきあと、一にまゝに至るか。

君の暑假をわて、歸郷せられてより、は、たゞ一たび、安着したりとの文に接せしのみにて、ろの後は、絶えて、音信なかりき。われは、君が南海の潮風

に剛骨を鍛へ、傍大に萬里の洪波に、詩想を練りつゝあらむとのみ思ひ、俗事に追はれて、寸暇なきまゝに、君の安否を問ふの機なく、荏苒として、九月の初めつ方に至りしに、ある夕まぐれ、三日月の影、かすかにほのめきて、露に咽ぶ虫の聲、いどかなしき頃、君の父君より、一封の文はとゞきぬ。われに用事もあらば、君より文をおこせらるべきに、父君よりおませ給ひしおとの訝しく、且、表に、至急と認めたれば、ますます、あやしく思ひ、何となく、胸うち騒ぎて、封切るほども、もどかしく、あわたしう、讀みくだせば、君は、腦膜炎にて、逝去せられたりとあり。夢かとはばかり驚きはてゝ、あはしは、物も覺ゆざりしが、やゝありて、われは辛うじて、悲しさを制し、直に、君の父君に、返詞をおくりて、重任の君の、病革まらむとする時、いかなれば、電信にてなりとも、われにそを告げ給はざりしか。さあらむには、一時なりとも、君を看護し、大なる志望を懷きて、むなしく、地下に入ら

むとする、君が千古の遺憾を、慰むることを得むに。人には、うちあけざりし胸中の秘事も、かたみに語りあひて、骨肉にもまさりし中らひなりしに、いかなれば、君の病みて、打臥し給ひしおとを、一言なりとも、告げこし給はざりしか。君のうせ給ひし後にて、ろを聞きたりとて、はた何のかひかあらむ。終天の恨にこそなど、最愛の一子を失ひて、あけてくれ、悲嘆に沈みつる、君の父君を慰めむともせて、却りて、かく、恨言のべたりしこと、今より思へば、いたう物ぐるほしきも、また、悲しさのあまりなりけり。あはれ、相提携して、世に立たむと約せし君は、無限の憾を呑みて、はや逝きましぬ。残れるわれは、俗にはなれし孤雁の、いづちさして行かむともわかず、朝夕、ひた泣きに泣き、茫然として、出づる所を知らず、はては、わがいのちおもひにかなふものならばともにもこぼむ死出のやまみちとまで、思ひせまりしが、また、醜然として思へらく、われ今君の後を追ひて、

地下に入りたりとて、何の効かあらむ。君は必ず、ろを嬉しどもねばさて、
なか／＼に、ろの無氣力を笑ひ給ふらむ。發奮して、とく／＼業を終へ、宿
志をはたしてこそ、君は首肯せらるれと思ひかへして、いろしみ勉むる
程に、うたてや、年ごろ、病弱なる身は、忽ち、おもき脳病にかゝりぬ。ろの年
も、いつしか暮れて、新玉の春を迎へたれど、わが病は、いさ／＼かも、快き方
に向はず。その年も、また大方病床にくらして、今こゝに、二十九年を迎へ
たれど、宿痼荏苒として癒えず、からだやう／＼衰へゆきて、豪飲して、君
と快談せしが如き、昔日の勇氣も失せぬ。あはれ、われもまた、地下に入る
の日、遠きにあらざらむ。

われもと、多病なり。病むことあれば、君は倉皇として來り、われを見るこ
と、さながら、骨肉の如く、看護のいとねもごろなりしかば、げにわれは、常
に感涙を禁ずること能はざりしなり。われ、今病めり。而して、君はまた、わ

れを訪はず。病床寂寞、愁思亂れて、麻の如く、通宵呻吟して、眠りがたきこ
と、幾夜なるを知らず。

君逝くも、われもし、永く世にながらへて、學につとむるをえば、或は、一大
詩篇をものして尤も、斯道に志篤く、前途に大なる希望を抱きて、夭折せ
し君を歌ひて、廣く君が志を世に示し、いさ／＼か在天の英靈を慰むるに
足るべしと、思ひたちて、君にわかれてより、片時だに、忘るゝこと能はざ
れど、不幸にして、久しく、病魔に惱まされ、學業遲滞、依然として、吳下の舊
阿蒙たり。噫、成業の時、果して、何の日に、かあらむ。若し、業を終ふるあと能
はず、君の遺志をも、世に示すあと能はずして、地下に入らば、何の面目あ
りてか、君に對せむ。あゝ、わが腸は、寸斷せらるゝが如き感あるなり。
君にわかれてより、はや三年、ろの間、決して短しとせず、さるを、たとひ、病
めりとはいへ、君と共に、勉めざるべからず、勉めざるべからずと、誓ひし

ことも、打忘れて、あだにのみ歳月を消し、一として、身に得たるあとなかりしなど、まことに、長大息のいたりに堪へず。徒に、心を痛むるほどに、今年も、はや春となりぬ。駘蕩たる東風は、吹きろめぬ。風光は、舊の如し。而して、君は在らず。再び、君と花下に酒を酌まむとするも、また得べからず。一軒の落日、悵然として、風に向へば、散り來る花片紛々として、物ねもふ袂に滿つるも、あはれや。

亡き母

朝よりふりつゞきたる春雨の暮れかゝりてもなほやまざるに、入相つぐる鐘のねも、いとゞまめりがほに、さゝわたされぬ。媚びたるあゑしてかへりくる手がひの猫の、ぬれたるせな、に、幾片の花をのせたるにも、く

八

九

れゆく春のなごり志のばれて、浮世のはかなさ、今更に身に志むこゝちぞせらる。げに、樹志づかならむとすれば、風やまらずとや。われ、母をうしなひて、うき月日を泣きわたるあと、こゝに幾年ぞや。

わが亡き母は、歌をよみ、文をかき、書をさへ、よくし給ひけり。その歌、その文、その書の今にのまれるもの、いと多かるが、おのれ、おの頃、それらを集めて、一冊となして、『花の車』と名づけ、暇ある折ごとには、常に、るを繙くを例とせり。今宵も、とりいで、見るに、母のねもかけ、たのづから、目のまへに浮びて、いにしへを忍ぶの思ひ、おさへむによしなく、みるく、あやしきまで、に、袂のしをれゆくも、軒の車のかよひくれば、にやあらむ。

明治二十一年十一月二十四日は、實に母君のおの世を去りたまひし日なりけり。はじめ、母君のお、ちすぐれずとて、うちふし給ひしは、十月の上旬にして、籬の菊も、やうく、色づきそめむとする頃なりき。菊は、やが

て、咲きけれど、君が病は、をこたらず。十一月の半ばごろより、いよくあつしうなりゆき給ひぬ。その時、たのれは、神田小學校に通ひけるが、恰も、學期試験にかゝりて、いみじう、いそがはしく、思ふまゝに、看護しまるらする。おともえせず、心のくるしさ、いはむかたなかりしに、その月の末、またく、試験をはりて、五日あまりの暇をいしかば、日夜、枕邊にさもらひて、看護しまるらせけれども、志るしは、つゆも見にざりけり。かくて、十一月二十三日の晝や、すぐるまろなりき、母君は、つく／＼と、おのが顔をうち守り給ひて、のたまひけらく、いましよ、いましが心づかひは、かへすがへすも、嬉しうなむ。されど、いましよ、母の命は、はや、且夕に迫りたり。かくまで、おほしたてたる汝が行末をも見はてずして、この世を去りなむは、げに、悲しさのかぎりには、あれど、天命、今更にいかにせむ。わがなき後は、祖父母と父とに、よく仕へまつり、また、妹をも、いつくしみてよ。汝は

幼きほどより、病はほくて、死に瀕せしおとも、たび／＼なりしが、今よりは、一きは、身を養ひて、もはら、學の道をつとめねとのたまふに、おのれは、物も覺えず、たゞ涙にのみかきくれて、答へまつらむ言葉だにあらざりき。かゝりし程に、御病は、ます／＼、れもりて、その日の夕つかたには、はや人事をたほえさせ給はず、あくる二十四日、あかつきの月かげ、いとかすかなるまろ、終にえたゝずなり給ひぬ。たゞ夢どのみたどられて、かきくるゝ心、げにわれかのさまなるに、籬の菊も、うつろひはて、露にむせべるまほろぎの聲、折からとりあつめたる哀れをうへたり。これのれ、幼きほどは、きはめて、病多かりしかば、母君は、いたく心をなやまし給ひ、くすしのすゝむるまゝに、おのれを伴ひて、西の京なる叔父がり赴きたまひぬ。叔父の家は、鴨川のほとりにありて、風さわやかに、水清く、風光のをかしくめでたきおと、まゝとに、いふばかりもなし。病を養はむ

には、いとふさはしきとあろなりければ、一とせばかりの程は静かにあ
ゝにどいまりぬ。花よりあくる春の曙は、うちつれて、嵐山に遊び、月かげ
清き秋の夜は、手をとりて、鴨川のほとりにろいろありきしつゝ、ひたす
ら、病を養ひしに、やうく、名残なきまで癒へたりければ、明治二十一年
の春のあろ、今はとかへる雁がねと共に、花にわかれて、東の都にいろざ
つきぬ、あはれ、かくわが病のいねたるを見て、よろあばれし母君のうせ
給ひしは、ままだ、あの年の秋のことなりけり。わが病の時は、母君、おのれ
をかの地に伴ひて、看護にねんいとまなかりしに、おのれは、母君の病の
時、君をかの地に伴ひまつらず、また遂に伴ひまゐらするあと、かなはず
なりにしは、かへすく、口惜しさのかざりなり。思へば、ろのうるはしき
花あきらかなる月あろ、今は、なかくに、恨みなりけれ。

ろのあくる年、たのれは、また叔父君に招かれて、西の京に赴きしが、かの

都のねもしろき眺めも、物ねもひの種とのみなりて堪へがたければ、た
だ十日あまりにて、かへりきぬ。ろのちも、叔父君、まばく書をよせて、
来よと促したまへど、おのれは、辭してゆかざりけるに、この程また、おと
しは、博覽會開かれて、いとにぎはしくしかるべければ、必ずきたれよなど、
いひおこせ給へり。母のたはしまさむ世ならましかば、いかばかり、嬉し
うよまるべき文ならむをど、わが心は、なかくに、そなたにひかるべく
もあらざりき。

東叡山の西なる、玉林寺といふ寺のおくつきに、母の御靈は、どいまり給
へり。千年の老杉、まげりあひて、晝なほくらく、青苔、あたりをうづめはて
て、秋ならざるも、道いとつゆけし。去年の十一月二十四日は、たまく、母
の七年の忌にあたりければ、妹と共に、朝まだき、御墓にまうで、

二人してぬかづく袖にちりし葉の

は、そなりしもなつかしきかな

といふ歌をさしげて、かへりしは、昨日のごとく覺ゆるに、あもはや、去年の夢となりけり。

母の法號を、慈明院賢室妙薰大姉といふ。おのが號を、その法號よりとりいで、薰園と名づけしも、せめてもの心やりなりけり。

世におはせしほどは、朝ゆふかいなで、愛でたまひける猫の、うせ給ひしよりは、心なき身にも、さすがに、物さびしうや思ふらむ、その後、たゞわれにのみ馴れたるが、けふも、春雨のつれづれなるに、倦みてや、いとらうたげに、わがひざのへにむつれ來ぬ、にやうく、となくねにも、いにしへのまとも、志のびいでられて、せきくる思ひ、はるけどころもなきまでなるに、夜もいたうふくるに、やあらむ、隙間もる風も、一きは身にしみて、軒の玉水、窓の花の香、むかしの春をかたりがほなり。

十四

十五

野分

あすは、二百二十日とて、ひとへに、てけのおだやかなるをいのる日の、夕つかたより、雲のゆきしたゞならざるに、心もこゝろならざりしを、夜ふくるほどに、風いみじくふきいで、雨さへいたう加はりて、おれにある、物音、ちよろづのいくさ人の、をめきさけぶがごとく、あらぶる神の、おらぶかとも疑はれ、家はゆるぎうごきて、さながら、舟にのれる心地するに、おろろしきこと、言はむかたなく、家の人と、いただきあひて、夜もすがら、いもねず。

つとめて、雨風やゝをさまりければ、まづ、前栽をうち見いだすに、垣はくづれ、木はたふれ、めでにし萩の花、ことごとく、くちりて、庭には、足ふみいれ

む方もなし。

なき母の御墓やいかにと、いとおぼつかなく、いそぎゆきて、谷中なる玉林寺にまうでけるに、おくつきのあたり、荒れにわれたり。

母のため植ゑし小萩もをれふして

御墓のまがき秋くれむとす

くれゆく秋のあはれさを、まだきに、御墓のまがきに見るも、かなしきおとのかぎりなり。

あさゆふ、苔の下にもめでうつくしみ給ひけむを、かくなりぬれば、今日よりは、何にかこゝろなぐさませ給ふらむと思ふにも、そゝろに、うちしほたれて、まばしたゝずむに、かたへなる老松の、なかばふき折れたる枝より、露にぬれつゝ、なく蟬の、病みさらぼひし人の、かすかなる息の下に、後のおとなど、ほのかにかたり出づるにも似て、いとあはれなり。

あたり見わたせば、いたうあれたるに、たふれたる卒塔婆の下に、籬の朝顔の、をりまかれながら、さすがに、かたばかりさきけるこそ、露にてる花の姿に、あらましき風の心も、なごみはてけめと覺えて、ゆかしや。
家にかへりて、萩の家先生のもとに、

御園生の萩はいかにとおもひやる

わが心さへみだれがちなり

夕つかた、門にいでて、

野分してもずの宿あろあれにけれ

夕日さびしき門のをやなぎ

夜に入りて、源氏野分の巻を繙く。見わたせば、山の木どもふきなびかして、枝ども多くをれふしたり。叢はさらにもいばず、檜皮、瓦、所々の立節、透垣などやうのものみだりがはし。日の僅にさしいでたるに、憂へがほな

る庭の露、きら／＼として、空はいと凄うきり渡れるに、そまはかどなく
涙のおつるを、押拭ひ隠して、打志はぶき給へれば、中將のこわづくるに
ぞあなるといへるあたり、ならびなき筆のほひに、人やりならず、涙さ
へさしぐまるゝを、虫の聲さへ、いと悲しげに聞ゆ。

野分してあれたるやどにおく露の

夜寒をわびて虫のなくらむ

とよみたるまゝ、まばし巻をもとぢあへず、窓ねしあけてながむるに、上
弦の月、老杉のえだにかゝりて、ひかりもさびしげに、荒れたる宿をてら
せり。

軒の玉水

夜もいたう更けたらむ、あたりには人のけはひも絶えはて、降りしきれ
る五月雨に、軒の玉水の音、いとさびしさを添へぬ。書よまむは、かゝる
時あるとて、残燈をかゝげて、ひとり、見ぬ世の人を友となし、清興わくが
如くなれるに、ほと／＼と、わが柴門をたゞく音す。この深夜、おとに、かく
降りしきれる雨をつきて、いづこいかなる人の、訪ひきにけむ。それよ、を
り／＼、十六夜日記をしへてよとて、訪ひくる少女の、日々、繼母なる人の
呵責にたへずとて、暗涙に咽びければ、涙もろき身の、わが身につまされ
て、袂ほしもあへず、あまりに、呵責はげしからむには、いつにても、逃れあ
よ。われゆきて、その繼母なる人に、諭すおとあらむなど、慰めけるに、ひと

夜、泣いてのがれ來ぬ。今宵もまた堪へがたうて、のがれきしにはあらずやと思ふほどに、また、やゝはげしく、二つ三つ、門をたたく音す。今は、ためらふべきにあらず、應といらへて、門をひらけば、闇にもあるき少女の姿の、年の頃も似かよひたれど、兄君と呼ぶは、父の許にありけるわが妹の聲なり。

衣ひたぬれにぬれて、聲さへうちしめり、兄君よ、父上には、今しも、臥床をいで、厠へおもむかるゝ途中、俄に倒れたまひて、人事を辨じ給はず。母上、今介抱し給へど、あるしは、見ゆず。はやう來りたまひてよといふ。意外なる妹の詞に、心もろらに魂きえ、はやうち臥し給ひし祖父母の君に、この事を告げまるらせ、妹と共に、雨をつきて、父のもとにいたれば、はや人こゝちつきけむ、氷にて頭を冷されながら、蒼白き顔して仰臥し給へり。御心地いかにと問へば、心を勞することなかれとのたまふ。常にいとす

くやかなる父の、かばかり弱りはて給ふを見て、いかで、心を安んずるところを得む。走りて、一醫の門をたたくけば、不在なりとて、來らず。去てまた一醫の門をたたくけば、こもまた、不在なりとて、きたらず。夜は、いよゝゝ、ふけゆきて、雨は、いよゝゝ、ふりまさりぬ。連日の降雨に、泥濘、木履を没し、心のみいろがれて、つまづきて、轉せむとするあと、幾たびなるを知らず。

むなしく家に歸れば、父すやゝと眠り給へるに、すまし心を安んじ、あの夜は、枕邊にもりあかして、つとめて、山龍堂病院をとひて、かねて親しうせる一醫に來診をこひしに、快く諾ひて、われと共に、家に來り、診斷して、腦充血ならむ、さまで、心配するを要せじとて、何くれと、注意して、かへりぬ。折しも、午前八時をうつ時計の音す。父、指折りかぞへて、今日は、大切なる事件を辯護すべき日なり。かばかりの病、何かあらむとて、強ひて、病ひをたすけ、奮然として、裁判所へおもむかれむとす。われら、言をつくし

て諫むれどもきゝ給はず。こゝに、父と車を同じうして、裁判所にいたり、その辯護のをはるまで、扣所に佇みぬ。万一、父に異變はあらざるかと、心も心ならざりしに、待つこと、二時餘にして、辯護またく終りて、法廷よりかへり來たまへるを見れば、顔色ますます蒼白く、氣息奄々たるに、その辯論のはげしさも思ひはかられて、覺せず、わきいづる涙を袖につゝみ、御障はあらせざりきやと問ひけるに、たい水との給ふ。清水をくみ來りてさゝぐれば、一息に飲みほして、惡寒おろひきたりて、やゝ心地わるく、頭痛いとはげし。されど、はやれの任務はとげたれば、心おちるぬとの給ふ。家に販りて、直に褥につき給ふに、發熱いみじく、驗温器を出してこれを檢せしに、まさに、四十度五分を止めせり。夜に入りて、醫また來り熱のたかきを見て、解熱劑をましてかへぬ。あはれ、職務のために裁判所へ出てたまふことなかりせば、病も、かくばかりは重らざりしを。

かくて、あくる日、陰雨おとなくをさまりて、空うらゝかに晴れわたりたれど、父の病は、いさゝかも快からず、父はもと壯健にて、いまだ嘗て醫の診を受けしおとなきに、今この大患にかゝり、熱度四十度以上にいたり、躰さながら火のごとし。世の常の者ならむには、呻吟苦悶の聲、きくに堪へざるべけれど、さすがに、雄々しき性とて、一たびも、苦聲をもらしたまはず。あはれ、父の心中いかばかりか苦しからむと思ひては、なかゝに、心ぐるしさ、いはむかたなし。をりゝ、その容躰を問へば、さしたるおとなけれど、頭重くて、讀書することをえざるを憾とすと答へたまふ。あはれ、病重くして、なほ書をひもとかむと欲したまふに、そゝろに、關心唯有嚼餘書といひし大槻盤溪が獄中の詞も思ひいだされてなむ。

かゝるさまにて、二日三日をすぎさりぬ。一日、父われにむかひて、先に辯護せし事件の判決は、いかになりたるか、知らまほしければ、電話にて問

へとあり。今なほあを問ひたまふ。あゝ、かの判決は、既にわかりしなり。されど、かの判決は、不幸にして、敗訴に歸したりしなり。今まで、そをつゝみて語らざりしは、偏に、父の心を煩はさざらしめむがためなり、今あの間あり、語るかたよからむか、語らざるかたよからむか。かたりて、父の病勢をまさしむることあらば、いかにせむ。語らずして、永く父の心を煩はさしむることあらば、いかにせむ。語らむか、語らざらむか。われ、竟に出づるとあるを知らず。

忽ち、われは、語らざるにまかずと決し、直に、父の枕邊を辭して、いはるゝまゝに、電話室におもむき、霎時して、いまだ、わからざるよしなりと復命せしに、父瞑目して、僅に、うなづき給へり。あゝ、われは、父の心を煩はさざらむと欲して、父を欺きぬ。

その夜、父の病、ますます、はげしうなりぬ。熱は、四十一度にのぼりぬ。醫診

して、腸質扶斯ならむといふ。されど、いまだ判然せず。醫、かへりて後、父はまた、かの判決は、わかりしかと問ふ。熱は、かく高し、世の常の者ならむには、苦悶に堪へずして、ほとゝ、物もおぼえざるべきに、父は、いさゝかも、さる氣色なく、我を見て、また、こを問ひ給へり。長くつゝ、みおかむには、却りて、父の心を煩はすこと、大なり。まかず、その實を告げむにはと、今は思ひさだめて、さきに、判決書きたり、一見せしに、不幸にして、あなたの敗訴となれり。もと、無理なる事件にて、萬一の勝をたのみて、引受けたまひしもの。今敗訴となりたりとて、何ぞ、煩慮せらるゝとあらむと答へけるに、父、敗訴とか、詮なしとのみのたまひて、また、瞑目し給へり。一座語なく、相顧みて、涙數行下る。

醫に、父の病症を問ふに、窒扶斯ならむといへり。山龍堂病院長樫村博士は、父を知れり。博士を延きて、一診を乞はまくねもひ、これを、博士の高弟

たるかの醫にはかりしに、博士を延いて、その診を乞ふこともとより可なり。されど、博士、今肺患にて危篤なる徴候あれば、來診せむなど、思ひもよらずとなり。

その翌日も、熱度たかく、病勢、日にまさりゆくが如し。その夜、初更のあろ、看護の暇をぬすみ、書生なる宮澤氏を伴ひて、裏猿樂町に、青山博士を訪ふ。博士、父を知らず、我また博士を知らず。まづ、玄關より刺を通じて、恭しく、その來診をこふに、書生、出できたりて、先生はや眠りたまへり。先生は、すべて、知人の紹介なくば、一切、往診せられざるさだめなれば、誰か紹介者をもとめて、きたらるべし。先生の知人なるなにがしは、あの近隣にすまひて、たなじ辯護士なれば、知られざることなからむ。ろの紹介をえて、重ねてきたらるべしとあるに、かへさむ詞もなく、やがて、博士の邸をいでぬ。なにがしは、父を知らるべけれど、我を知らず。われ今突然、半面の

識だになき人のもとにいたりて、ろの紹介を乞ふも、おろらくは、これを諾せられざるべし。いかにせばよからむかとて、これを同伴の宮澤氏にばかりしに、わが友なる高橋といふ人、かねて、なにがしの書生にして、いまは、神保町の旅館に寓せり。氏に頼みて、その紹介を乞むとあるに、やゝ力つきて、ろの旅館にいたれば、はや、戸をどちたり。宮澤氏、熟睡せる宿婢を呼びねこして、高橋氏の室にとほれば、氏、なほ、青燈のもと、まきりに、書をよめり。宮澤氏、今夜のことを語りて、なにがしの紹介を乞ふ。高橋氏、快くおれを諾せられ、三人つれだちて、なにがしの家にいる。時に、夜すでに二更、門ははやとざされて、いかに呼べども、聲なし。こゝに、つとめて、再び訪ふこととなし、更にひきかへして、かの博士の邸にいたれば、かの書生、恰も、ろのかどをどざさむとするところにて、われらの紹介書をもてきたるを、待ちわたりぬといふ。われは、まづ、その厚意を謝し、なにがしの

ことを告げて、明日、かならず、その紹介をねて、きたるべければ、先生へよきに傳へてよと乞ひて、ろこを辭しぬ。夜もいたう更けわたり、萬籟死したるに、をりく、駿河臺のかたにあたりて、名も知らぬ怪鳥の、闇になくおゑ、いとあはれなり

翌日、曉はやく、宮澤氏とともに、かの高橋氏の旅館をどひ、三人またつれだちて、なにがしの家にいたれば、いまだ門をひらかず。やうやく、呼びおこして、先生に遇はむといへば、先生には、いまだ目ざめ給はずとのあとに、かさねて、夫人に遇はむといへば、昨夜よりあゝちすぐれで、うち臥したまへりなど、いと冷淡なる答なり。こゝに、われは、大に決するとあるあり、高橋氏にろの勞を謝し、馳せて、青山博士の邸にいたる。博士、今や醫科大學へ赴かむとする際なりしが、まのあたり、博士に接し、昨夜來のあとをかたりて、切に、今朝、父を診せられむことを乞ふに、博士わが心を憐み

給ひけむ、まげて、あを諾せられければ、欣然一揖して、家にかへり、父に詞みじかく、今朝、博士を延きて、診察を乞ふにいたりたるあとを告げまゐらせしに、一言も答なく、たゞさびしげに、うちゑみ給へり。とかくするほどに、博士は來られぬ。診斷して、一のおもき腸質扶斯なり、とく、病院に入りて、療養すべしとて、大學病院あての添書をくだし給ひ、なほ、何くれと、注意して、かへりぬ。重き腸質扶斯ときへては、心ますく、平らかならず、直に、入院のあとに決し、博士の添書をふところにして、心もそらに、本郷なる大學病院にゆきて、それを係員に示し、入院のことを乞ひしに、折角なれど、病室、ことく、く、ふさがりて、明きたるところなければ、如何ともなしがたしとのあとに、いたう失望してかへり、電話にて、諸方の病院へ、問ひあはせしに、向暑の折といひ、ことに、あとしの氣候あしきたため、病者いとおほく、いづまにても、一の空室さへなしとなり。

かゝりしほど、山龍堂病院より、例の醫は、きたられぬ。醫に、入院のおとを
はかりしに、さしあたり、空室なけれど、二三日待たれむには、くりあはせ
むとの答に、心ならずも、あゝに、數日をすごし、が、いよく、空室を生じ
たりとて、例の醫よりいひおこせれば、入院するおとに決しぬ。

父なほくさくさの俗務の、心にかゝりて堪へずやありけむ、かの事件は、
いかにせむ。あの事件は、いかにせむなど、まきりに、考へたまへるもの、
ごとし。われ、いたくこを憂ひて、さるおとは、御心になかけさせ給ひる。父
君の門より出でて、一家をなせるもの、その人に乏しからず。一切の事件
は、その人々に托して可ならむ。かへすくも、百事をなげうちたまはず
ば、あの病は、癒えざるべしときこゆしに、ろなたの意に従はむとて、それ
よりまた、口におのが職務のとをいはず、たゞ昏々として、眠りたまひぬ。
曉はやく、東天いまだ微紅を潮せず、街上、関として、聲なきとき、とほく神

田神社にてうち鳴らす太鼓の音をきくつゝ、父は、釣臺といふものに載
せられて、家をいで給ひぬ。われら、肅然として、後に従ふ。涼風、かろく袂を
ふきて、曉氣いと清し。はるかに、かの神社のかたを望みて、一日もはやく、
父の病のおこたらむことをいのり、さて、入院後のおとななど、なにくれと
考へけるに、はやくも、小川町なる山龍堂病院につきぬ。釣臺のまゝにて、
見るもいぶせき病室へになひ入れられしときの、父の心は、いかなりけ
む。父の病みさらばひし姿を見て、ろの生平すくやかなる風、手の、まのあ
たりに見え、かくもいみじう變りはて給ひしかと思ひては、ろいろに、袖
をうるほしぬ。妹も、またたなじこゝろなりけむ、うつぶきたるまゝ、顔も
えあげず。こゝちにてても、わろきにやと問ひしに、顔をろむけて、涙をかく
すさまの、いぢらしさに、覺えず、またうちしほたれぬ。
入院してより、病勢ますますはげしく、二週間ばかりが程は、危篤にたち

いりたること、幾たびなるを知らざりしが、藥石、竟にむなしからずして、一月をふるほどに、やうく、快きかたにむかひぬ。われらの嬉しさ、また何にかたとへむ。父、つねに、忠臣義士のことをかきたる畫圖を好み、藏するところ、きはめておほかり。父の命により、そを取りいで、壁間にかゝげしに、病苦をわすれて、賞觀したまへり。父また、つねに、靖献遺言を好み、おとに、文天祥正氣の歌を愛誦して、たかず。今、われをして、おのうたを誦せしめ、かたはら、又、ビック、ウイック、ペーバースなど、讀ましめて、心をやり給へり。ろれより、また、一月ばかりを経るに、ますく、こゝろよく、竟にまた、くいねられしかば、多くの人々におくられて、欣然、父とともに、病院の門を出でぬ。さきに、釣臺にのせて、父を病院へおこり、まるらせしときのことろを思ひいで、おぼえず、また涙をおとしぬ。

* * * * *

今こゝに、父と共に、都門の苦熱をさけて、比叡の山中、松風すゞしきとある、詩を論じ、文をかたりつゝあり。一夜、雨蕭々、頗る妹の、父の病を急報せむとてきたりしかの夜半に似て、ろゝろに、今昔の感にたへず。おはれ、かの夜、妹のとひきたりしを誤りて、かの少女の、繼母の呵責にたへずして、逃れきたりしならむと思ひしも、はかなき夢なりけり。さるにても、かの少女、今はいかにしつらむ。

黒風白雨

あるかなきかの風、木立の梢のみにおとづれて、室内は、蒸すが如く、あつさ、堪へがたきに、おはれ、一服の清涼劑もがなと、書架をさぐりて、アーヴィング文集をえたりければ、それを繙きて、心にかなへる文をよみゆくに、睡

魔まきりに襲ひ来て、身は、いつしか、黒甜郷に入らむとす。忽ちきこゆる
霹雷のこゑに打驚きて、簀の端にいで、大空を仰げば、見るがうちに、墨
を流したらむが如くかきくもり、軒の風鈴いろがしく、窓前の蕉葉のさ
やぎたいならざるに、颯とおろしくる怪風にさそはれて、豆の如き大粒
の雨、ふるやの、軒もくづれよとばかり打注ぎ、電光雷鳴の空にみだるゝ
は、魔王の荒ぶるかとおそろしうぞ覺ゆるや。この雷雨の聲にもまぎれ
ぬばかり、柴の戸を叩きて、案内を求むるさまなるに、誰そと出で、見る
に、横濱なる一人の友なりけり。途にて、この大雨にあひたりとて、麥稈帽
子よりまたゝる、栗、拭ひもあへず、あわたゝしく、入り來れり。思ひもかけ
ぬ對面なるに、その後には、身のたけ、四尺ばかりの黒奴の、白き服をつけ
たるが隨へるに、わが不審は、晴れやらす。

して、おれは、二三日、前、横濱へわたり來りし、ろんぐ島の土人なるが、よく
英語を解し、いと快活なる男なれば、話して見給へといふ。

われは、試に、その名を問ひけるに、發音爽かにまつど、さむなりと答ふ。友
は、さむに、何かめづらしき話もあらむに、いかで語らずやとすゝめける
に、彼は、領きながら、黒き頬に、笑を湛へて、まばし、頭を傾けゝるが、かたへ
なる一杯の珈琲を、ひと口飲みて、さて、徐ろに、語り出さむとす。
時に、雨ますくはげしく、電光一閃、戸の隙を貫きて、室内に迸れり。
一とせ、夏の夕ぐれ、釣竿を肩にして、きりあん、さいだむなるわが茅廬を
出でぬ。へん、はんどちつけんすより、輕舟を艤して、ぼつとに出で、ろれより
ふらいんぐはんと漕ぎめぐるに、夏の常とて、たまく、西の方に黒雲あ
らはれろめしが、またくまに、満天を蔽ひ、電光、まばく、雲を破りて、水
にひらめき、迅雷、耳をおほふに、遑あらず、物すごきこと、言はむ方なし。我

は雷雨をさけむとて、まは、たん島の岸に沿うて舟をやり、島隅に突出せる岩かげに漕ぎつけ、巖上より猿猴の手を延ばせるが如く水面を蔽ふ木の根に、固く小舟を繋ぎ、まばし、疾風暴雨を木の下、岩かげに凌ぎ、熟睡しぬ。既にして、目さむれば、空さりげなく晴れわたりて、たゞ名ごりの電光、時々、東天にほのめくばかりなり。

われは、潮流を見て、はや小夜ふけたるあとを知り、いたくも睡りけるかなと呟きつゝ、舟をかへさむとする折しも、水上遠くあやしき光の見えそめしが、われは、早くも、ろの小舟の燈火なることを知りぬ。
あやしき光は、やうく、わが舟ちかうなれり。ろの光は、果して、小舟の燈火なりき。舟中の一人、岸に跳り上りて、何もとむるにか、もてる燈火にて、あたりを隈なく尋ねけるが俄に『鐵の輪は茲に在り』と叫べり。
われは、息をあるして、窺ひぬ。彼は、叫びながら、舟に歸り、一行なる四人の

男と共に、何か重き物にても、陸に上せむとするものゝ如し。かすかに漏るゝ火影よりすかして、彼等の、皆赤き帽子を戴き、短銃長劍を携へて、ろの面貌の、きはめて、瘴惡なるを知れり。時々、ひろく、と叫きあへるが、ろの聲、さだかには聽きわきがたし。

彼等は、上陸して、かの重き包を手にして、八重葎おひ茂れる中をかきわけて、森の方へと急ぎぬ。われは、おはきもの見たしといふ好奇心に驅られて、おそるくも、彼等の跡を追へり、とかくする程に、巨魁とおぼしき男、俄に立ちとゞまりて、一行を顧み、指して、鋤もて、地を掘らしむ。われは、樹上にて、彼等の爲さむとする所を窺へり。思ふに、彼等は何者かの死骸を埋めむとするなるべし。われは、覺えず戰慄して、わが身を支ふる梢を握り、あめし力の強かりけむ、風なきに、木の葉のさやげるを、敏くも、きゝつけたる一人、『心せよ、森の中に何か潜めり』と叫びつゝ、短銃をとりぬ。

南無三寶と生きたる心地もなかりしか、幽かなる一點の燈火は、あまりに黒きわが顔を、木葉と共につゝめる夜色に、えわかちがたかりけむ、巨魁は、先に叫びたる男に向ひて、何事をか注意するもの、如く、なほ奥ふかく進みゆけり。

われは虎口をのがれたらむが如く、腋下よりまたゝる冷汗を拭ひつゝ、茫然として、佇立みけるに、鋤の音、またさやかにきこゆ。わが好奇心は、制せむとするに由なく、竟に危難を忘れて、聲する方にと迫りゆきて、彼等を距る程、近き岩上にのぼりぬ。彼等の一舉一動、たゞ眼下に在り。

時に、黒風、白雨、颯を打つ音、さまざましく、雷鳴、耳を劈くばかりなるに、さむの話は、何となく、凄味を帯びきたれり。

彼等の提げ來りしかの重き包は、はや埋められにけむ、枯葉をかき集めて、その上を踏みならせり。『今は心安し』と、彼等の語らふをきゝて、我は

いかにして洩したらむ『悪き賊類』と絶叫せり。

わが意外の聲に、彼等は、いたく驚きけむ、燈火をさしむけて、聲を尋ねけるが、一人、忽ち、我を岩上に見つけて、ふりまほれる怒聲と共に、短銃の火蓋は、開かれむとす。われは、たゞ夢ごゝちにて、道なき道を、ひた走りに走り。一人、驀地に追ひ來りて、われを距ること、咫尺ならむとす。前には、屏風なす絶壁あり、後には、敵あり。進退維れ谷まりて、わが頭上を掠むる飛丸、雨よりも繁し。われは、竟に意を決して、素早く、かたへなる葡萄蔓に手をかけ、身を躍らして、岩上へのぼりしが、一丸、飛で、わが肩先を走れり。あはやと叫ぶ途端に、われは、岩下なる溪流に落ちたるまでは、覺ゆしが、その風によりは、いかにして、家にかへりしか、絶えて知らず。窓より吹き入る曉の風に、われは、始めて、われにかへりぬ。その夜の恐ろしさは、今なほまばし、わが記憶をはなれず、夏ながら、肌に粟を生ずるばかりにこそと言

ひさして、一息に珈琲を飲み干しぬ。

おもしろき話に、時のうつるをも忘れたり。夕立は、はや霽れたらむにとて、窓の戸おしひらけば軒の若竹にやどれる名残の露の白玉に、入日花やかにさして、涼しさいふばかりなし。

さむも、さすがに、風流の事を解せるにや、この夕ばえのえもいはぬ美景に見とるゝものゝ如くなりしが、やがて、莞爾として、下らぬ長話に、さぞやきゝあき給ひけむ。されど、あゝに、今一つ、先の話よりも、一きは、激しき危難に遭ひ、萬死の中に、一生をわたる譚あり。まげて、きゝ給ひねと、眞珠の如き白き齒をあらはして、語りいでむとする時、あたり、やうく、ほのぐらうなりぬ。かう暗うなりては、話も見ぬなるべし。まばし待ち給へと、マッヂをすりて、燈火を点せるに、俄に吹き入る一陣の黒風に、あへなくけたれけるを、さむの、何事をか怪しき土音にて、口走れる聲に驚きて、身

を起せば、おれなむ読みさしゝ、アーヴィング文集の上にむすびし一場の夢なりける。日は、夕に近づかむとす。石燈籠、斜に夕陽に射られて、三倍ばかり長き影を庭に印し、今日のなごりとして、きほへる蟬まぐれの聲、槐の梢に高し。

ゆ く 水

二人して眺むれば、あろたのしきを、こゝろなくてる夜半の月哉と、つゆかざるふしもなく、月前の情をうたひいで、おこせし少女のこゝろの嬉しさよ。さはいへ、われは、まか思はずとて、君にあふこゝちのみして照る月を、隠るゝまでもながめける哉。二人して眺めし夜半もおもほえて、嬉しき物は月にぞありける。など、かきつけて、贈りぬ。少女、うへなはむや

いかに。

少女氏は立花、名は光子。われと相知りてより、二年にやなりつらむ。光子はやくより、敷島の道に入りて、月のゆふべ、風のあした、わが柴の戸をたしきしあと、いくろばくなるをまらず。われ、光子を妹のごとくまたしめば、光子、また、われを兄のごとく慕ひぬ。さるに、ことし秋のはじめなりけむ、光子、俄かにやみて、大森なるおのが家にかへることゝなれり。かの月のうたは、やがて、光子が病床にてよみけるものなり。ろの、ち、光子より志ばく、ねとづれありしが、おのほどは、ふつに絶えぬ。

木がらしの風、ちりのありたる桐のこずゑをおとなふさま、さながら、目に見えぬ魔王が、よみよりおそひきて、いくろの人の玉の緒をうばひさらむとするがごとく、ふきすさぶ風のたねまゝに、瘦せさらばひし病婦の、うめきいづるにもまがひて、あるかなきかになく蟋蟀のあゑ、あは

れなる夜、そゝろに、光子のこと志のびいでられて、たへがたきに、ろがかたはしだにはるけばやとて、そのうるはしき手の跡、とうてゝ見るになか／＼に、わが心をいたましむるのみにて、かた見ならねど、あだどばかり思はるゝも、はかなや。

うれしき夢のあとをたどりける曉、光子の母なる人より、一ひらのふみは、とゞきぬ。胸とゝろかして、ひらき見るに、光子の病は、日にそへて、あつしうなりまさりぬ。あさゆふ、君の上のみかたりいで、はうちしほたれぬるを、あはれともおぼして、せめては、息あらむほど、どはせ給はずやとあるに、うち驚きて、いろぎ、車をはせて、光子をおとなふ。名におふかや、くばかりのれもわ、いみじう青ざめて、生ける色もなきに、いかでかばかりは、おどろへはてけむと、まづ、眼ぞまばだゝかるゝや。われを見て、さびしげに、打ゑみつゝ、よくあると言ふも、いたうくるしきけはひなり。かた

へには、又母なる人の、面をもあげず泣きふせるに、身もよもあらぬあ
ちす。まばらくして、光子、左右より筆と紙とをもとめて、何かまため
むとせしが、手わなゝきて、ものしほざりければ、わが耳に口あてゝ、玉の
緒は今かたゆらむ來ん世にも、人と生れて君にあはましと、つゞきては
絶え、たえてはつゞく三十一字を、いまはのことばとして、その夜、かたく
わが手をにぎりしまゝ、一片の笑がほをのまして、うせにき。
のぼる烟と共にたちさらで、のこるおもひの身をこがしつゝ、風去ろき
冬のあかつき、板橋の霜に、心と共にみだれたるわが足あとを印し、逝い
てかへらぬ里川のすゑ見まもれば、草葉にむせぶ水のおと、光子が今は
のまゑをきくあゝちのみせられてなむ。

虫の音

月かけ、隈なくはれわたりて、つらぬきとめぬ露のまら玉、庭の萩原にき
らめき、清光、世のわづらひをわすれしむる夕、ふづくゑによりて、すゝる
に、トムソンの秋の歌を誦しけるほど、軒端より、いみじうわびしげに、き
りくどなくあゑするに、と見れば、いにし夜、弟の縁日にもとめあし
蟲籠よりもれたる悲しき音なりけり。あはれ、見るもいぶせき籠のうち
に、かざりなき愁思をかあつも似て、いとほしさ、いはむかたなきに、前萩
のまげみなる小萩のもとより、おなじあわねながら、いとさねたるが、き
こゆ。はかなき餘命をたのみて、まばしなりとも、さやけき月に、うたうた
ふらむ友のうへを見ては、いかで、うらやましからずやは。いでや弟のめ

さめて、むつかりなば、ともかくもせむと、いそぎ、籠を開きて、放ちやりぬ。
折しも、月は、片雲に隠れて、あたりをぐらく、嬉しげに、飛びゆく蟲の、かけ
は見えねど、やがて、いよ／＼すみゆく聲に、わが心、また、いと／＼すみわ
たりてなむ。

わが姉君は、十ばかりにて、うせ給へり。まだ、母君の膝のへにむつる／＼ほ
どより、いたう、蟲の音を好みて、耳をかたむけられしが、身まかりたまひ
けむ年の秋、門をすぎゆく蟲、うる翁をまねきて、松、虫鈴虫なども、め、籠
にやしなひて、めでうつくもみたまふよと、ことわりにもすぎたり。やま
ひの床にふしたまひてよりは、一きは、らうたきものに、ねぼし、よひ／＼
のねごめがちなる窓のもとに、またなき友とむつばれぬ。くれゆく秋の
哀れは、わが姉君をもさるひて、露ふく風にたぐへけるが、虫ども、また
はかなくなりて、籠のうちには、あさ瓜のきれ、さひしげに、うせにしある

じをまもりがほなり。ろの、ち、いくろの秋をかおくりむかへけむ、かの
籠のみは、今もなほ姉のかたみと、軒端にかゝり、ふく夕風につれて、唧々
たるむかしのこゑをきくは、わが心の迷ひにや。

新聲臨時增刊

◎明治文壇の精華を集めて此

◎出版後漸く一ヶ訂正參版發市◎紙數大判百四十頁

秋風琴

筆蹟(寫真)尾崎紅葉君、正岡子規君(俳句)
故一葉女史(傑作十三夜之原稿)
 寫眞(寫真)大町桂月○島崎藤村○德富蘆花
銅版)○小栗風葉○泉鏡花○内田魯庵
○田岡嶺雲○大野洒竹の諸君

小説

夜汽車(秋風琴要目)
 零落
 春江
 監督喇叭

内田魯庵
 德富蘆花
 小栗風葉
 泉鏡花

美文韻文

わが初恋
 村の白壁
 野法師
 法なる嘆き

與謝野鐵幹
 田山花袋
 薄田泣菫
 小島烏水
 蒲原有明

評論

水の詩趣
 詩人の評價
 非功名心論
 宗教界文士

久保天隨
 後藤宙外
 佐藤橋香
 緒方流水
 中村春雨

長舌

文壇風聞記
 文界一夕談
 文士雅號譚
 文界と梨園

妖堂居士
 某文士
 支々
 梨園
 紫雲紅霞

◎秋の聲天隨、花袋、風葉、鐵幹、鳥水、春雨其他◎花籠の一欄には江湖青年諸子の作を收む小説あり論文あり美文あり

新聲出版社

新刊.....新刊

自然美觀

新聲出版社

無名氏著◎山中古洞表紙畫

巍峨たる山、澎湃たる水、天は渺邈として無數の星辰を懸け、地は寥曠として百二の山河を載す、春秋代謝して花月の觀、未だ盡きず、風雨調和して禽蟲の聲、遂に老いず、是れ實に自然の一大美觀に非ずや、人は此間に倚徒して閑懷を恣にし、仰て奥妙の神祕を想ひ、俯して無限の妙微に接す、而して清淨なる觀念は此に養はれ、嶄新なる理想は此に産る、若夫れ萬斛の吟思凝つて筆を忘我の靈境に驅らむとするの時に至ては、我は六根汚濁の人の子にあらずして、既に自然の寵兒たらんとする也、著者は筆の奇矯と識の博該を以て名を當代の文壇に馳する者、自然に吟嘯する茲に幾年、詩の眼光に映じて種々觀察を恣にし、此を「自然美觀」と題して梓に上す、均しく自然の寧馨兒たらむ者は、請ふ讀過十襲して其の價値と興味とを玩把咀嚼せよ。

全一冊頗美定價郵稅共貳拾錢

- 第一總論
- 第二海
- 第三山
- 第四草木
- 第五天象
- 第六風
- 第七雨
- 第八雪
- 第九霧と雲
- 第十露
- 第十一雜種
- 第十二鳥獸
- 第十三色相論

青年文壇の堅中

本誌は、材料の豊富と、定價の至廉とに於いて他に比なし、

青年文壇の堅中を以て目せらるるもの實に茲に在り。切に青年諸君の

秀出の稿を充つて、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

士の投稿に充つて、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

采の稿を充つて、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

句評の筆を以て、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

文の筆を以て、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

特色の筆を以て、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

贊の筆を以て、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

すの筆を以て、其論の美と觀又と論若くは、本誌が由來一

本誌は、材料の豊富と、定價の至廉とに於いて他に比なし、

新聲

新聲社出版書籍要目

毎月一回十五日發行
 一部八錢 郵税共五拾錢
 六部前金郵税共五拾錢
 爲替は『錦町』○郵券一割増

歓迎投稿

新刊

風月蓮

著 東犀府國

錢五廿價定
 錢四稅郵

國府犀東君、豪宕矯健の筆と、縦横四面の才を以て、
 夙に一代の奇傑を以て稱せらる。本書は君が雜著
 を集めたるもの、世を嘲るの涙あり、自然を歌ふの
 聲あり、一字一涙、一句一血、興味楮端に逸出し、
 韻聲縹緲として終に盡くへからざらんす、一巻悉
 く是れ三嘆九誦の出色文字。

弦月

新聲記 定價貳拾錢
 者編纂 郵税四錢

青年文士の作を「めて」弦月」を編す。襟むるさふるの文、無量數十篇、江湖俊髦の筆に成れるもの、
 美文あり、小説あり、隨筆あり、一篇ごとに趣味饒多にして詩境自ら新脆、之れを譬ふれば、秋葉水
 を蘸して奇香雨に濡ふが如く、落梅橋を撲つて冷艶風に瘦せたるが如し、今や詞壇振はず、文華漸く
 地に委せむとするの時、衆芳の茁を以て多彩な文壇に呈し來れりし吾新聲は、更らに英を含み華を
 咀ひ一卷の「弦月」を刊す、「弦月」は近時文壇の珍寶を以て自ら許すもの也。

新聲社發行

大日本文章學會編

文章形容辭典

上製 定價三十五錢
金文字入 郵稅六錢
並製 袖珍洋裝 定價二十五錢
美製本 郵稅四錢

文章に尊ぶものは形容語に在り、其趣味を饒にし、文意を明にし、はた姿致に富ましめんとせば、必ずや形容語を巧に按排するを要すること、論文と美文の差なき也。例へば思想泉の如く湧き來りて、滔々千萬言縦横に渾灑せんとするも、若し辭藻に貧ならば、如何にして、其十が一だも舒ぶるを得んや。文章の基礎は實に形容語に在り。常に之を豊にして満腹便々、時に應じて筆端窘束するの虞あらしむ可からず。是に於いてか世間美辭麗句を集めて、此必要に應せんとする者あるも、多くは文章に關して何等の定見を有せざるもの、筆に成り、只漫然文字を列ねしに過ぎず、毫も時流の文に資する所なき也。大日本文章學會之を慨し、山川講師主任となり、江藤米文學士之を助け、こゝに「文章形容辭典」を編す。古今の文學書類より出所正しき形容語を集め、題によりて分ち、順に従つて次第し、難解の句には一明細なる註解を附せるなど、從來の這種の書と大に書を異にするを知る可し。若し夫れ机上常に此書を友とする時は、形容の辭句に苦しむとなく、意味不明の文字を挿みて、文意を害するが如きは斷じてなかる可き也。

文科大學教授文學士 芳賀矢一君校閱
大野 洒 竹君序 沼波瓊音君著述 (新刊)

俳諧音調論

全一冊 定價郵稅共
洋裝 金貳拾錢

すべての韻文は、必ず調に重きを置かざる可からず、殊に俳句の如き僅々十七字の最短詩形に於いては、一音一字の關する所極めて大なる也。まさに其音調を正うして、内容と副はしき、完璧欠くるなきものとなさる可からず。而も從來音調の研究を試みしもの誠に寥々、漫然之を看過して、單によしといひ、おしといふに過ぎず。後進の士いかで字句の間に潜める深き意味を知るを得んや。著者大に之を慨し、深く古人の説を參考し、廣く音韻學語學等を尋ねて、俳句音調の研究に資し、以て本書を著せり。説く所極めて平易、條理又整然、類によりて別ち、難易によりて上下し、例を擧げ、古説を引き、讀む者をして一目瞭然たるを得せしむ、まさに『俳句評釋』と共に、得易からざるの好著也。

評釋叢書

文學士 久保天隨君著 (參版)

第一 漢詩評釋

漢詩は東洋文學の大産物なり、雄渾慷慨の氣格、高遠幽玄の趣味、他に比を求む可からざるもの、苟くも趣味を文學に有する者はこれが攻究を怠る可からず、本書は漢詩に於いて縦横の伎倆を有し、支那文學に於いて深遠の智識を蓄ふる久保文學士の著す所にして、評論の痛快なる、其文字の趣味深き、漢詩壇に一新特色を開けるもの也。

文學士 久保天隨君著 (品切)

第二 漢文評釋

文學士 阪本四方太君著

第三 俳文評釋

小説を草し美文に志ある人は必ず俳文の研究を積まざる可からず。蓋し其奇警にして洒脱なる、毛厘の微寸毫の小、描いて盡さざるなきが如き、一字一句の未尙は趣味湧くが如き、到底國文漢文に求む可からざれば也。

文學士 内海弘藏君著

第四 國文評釋

本書は主として作者の精神を發揮する趣味を啓發するに方向つて意を注ぎたるもの。難解の字句を釋し、文章の巧拙を論じ、時代を論じ、思想を評して、一毫の刺すなき。加ふるに評釋の文頗る出色、國語漢詩を自在に驅使して、趣味富饒を極む。

文學士 淺野馮虛君著 (新刊)

英文評釋

全一冊 定價 金二十錢
洋裝 郵稅 金四錢

本書は英文學を專攻せる淺野文學士が、英文壇の傑作を評釋せるもの也。縦横の評論丁寧の解説、一毫難解の虞なからしむるは勿論、殊に誇る所は、原文を美文的に譯せるに在り。艶麗暢達最も詩味多き文字を以て、一節々々を譯す。原文の趣味特色發揮盡くして遺憾なし。彼世上翻譯と稱する者の勃窣乾燥、無味砂を嚙むが如きものも同日に談す可からず、文界の寶典と云ふ、潜ならざるへし。

文學士 久保天隨君著 (新刊)

古詩評釋

全一冊 定價 金二十錢
洋裝 郵稅 金四錢

著者曩に漢詩評釋を著はすや、脛なくして善く千里の遠きに走り、版を重ねると既に數回江湖の歡迎以て想ふ可き也。然りと雖も其釋する所絶句に止まる、律躰の如きは剪裁對偶の技工を專にする者、強て云ふに足らずと雖も、詩の神處を極めんとすれば必ずや絶句と古詩と相待たざる可からず。著者即ちこゝに一流の詩家の古詩數十篇を選びて評釋を試む、其詩皆正、變を極めて人力の企て及ぶ可からざる者。評釋の文例によりて趣味横溢、而して文字前卷に比して大に平易、一讀よく解す可し。

全部六册

大判洋裝 百頁以上

定價 一部貳拾錢
郵稅 一部四錢

青年文學叢書

第一編	文學攻究法	定價二拾錢
第二編	美文作法	同
第三編	美學大要	同
米國文學士 江藤桂華君著 ◎全部完成		
第四編	論文作法	同
第五編	韻文作法	同
第六編	青年と文學	同

全部六冊定價郵稅共六拾五錢

田岡嶺雲君著

「嶺雲搖曳」は、嶺雲子が腐敗せる社會と戦ひたる記録也。沈滞せる文壇を警醒し、たる鐵鎚也。文に光輝あり、熱氣あり、論や卓抜斬新、一卷を貫ける熱誠と勇氣とは、儒夫尚ほ立たしむるに足る。社會腐敗文壇の沈靜依然たる今日、第八版を發行して、新なる讀者を待つ。

一冊 定價四拾錢 郵稅六錢

嶺雲搖曳

大町桂月序 幸輔秋水題
笹川臨風序 佐藤秋蘋題
八版

著者 妖堂居 幸田露伴 尾崎紅葉 坪内逍遙 森鷗外 福地櫻痴 響庭篁村 齋藤綠雨 川上眉山 廣津柳浪 須藤南翠 内田魯庵 二葉亭四迷 後藤宙外 小杉天外 泉鏡花 小栗風葉 江村水齋 村上浪六 遲塚麗水 巖谷小波 橋乙羽 塚原鐵柿 田山花袋 依田義賢 幸堂得知 嵯峨の屏 宮崎三昧 原抱一庵 二階堂葉長 田秋濤 西村天囚 松井邊霞亭 菊池幽芳 徳田秋聲 磯野秋渚 堺枯川 三宅青村 徳富蘇峯 陸羯南 朝比奈碌堂 賀川 桂月 嶺雲 山田 牛

諸君の學殖を養ふに、逸話の内幕を暴露する、無味砂を噛むが如きもの、味を吐く津々我々此書に在りて、眞味に他に求む可からざるもの也。

定價 郵稅 金 二 五 錢

文章通信教授

筆を採りて世に立たんことを者勿論、苟くも文字を假りて自己の思想を表はし感懐を漏らさんせば、農たるを商たるを工たるを論なく、必ず文章を練磨せざる可からず。然りと雖も我國に於ける作文教授法の不完全なるは、言ふ斗りなき程にして、中等の教育を受けたる者の如き、なほ破格不法讀むに堪へざるもの多し、况んや就いて習ふに書なく、よりて學ぶに師なき山間僻邑の子弟に於てをや。是れ學界の大缺點たるのみならず、延いて邦家の文運を阻害すること實に少からざる也。本會は此必要によりて起りたるもの已に一年半の歴史を有して基礎益々固く、生徒天下に滿ちて志望の一端を達するを得たり。講師及び學科は左に掲ぐる所如くにして、苟くも作文の資料となり、研究の參考となるべきものは、悉く網羅して些の遺憾なきを期し、簡明適切なる講述、丁寧懇切なる文章の添削、以て生徒諸子をして文章の瀟爽に通せしむ。

◎ 東京市神田區錦町二丁目六番地 大日本文章學會 ◎

文章作法	文學士 久保天隨
修辭學	文學士 杉海月
日本文學	文學士 大時敏
審美學	文學士 十時敏
國文評釋	文學士 大月桂
漢文評釋	文學士 久保天隨
國文評釋	文學士 大月桂
漢文評釋	文學士 大月桂
漢文評釋	文學士 大月桂
新法解剖學	文學士 大月桂

日本文人傳	米文學士 江藤桂華
英文評釋	米文學士 江藤桂華
日本文章史	米文學士 江藤桂華
故事釋義	米文學士 江藤桂華
熟語分箋	米文學士 江藤桂華
文章漫話	米文學士 江藤桂華
各家類纂	米文學士 江藤桂華
選美辭類纂	米文學士 江藤桂華
其他數科	米文學士 江藤桂華

規 則 書 ば 申 込 第 次 送 呈 す